
ダーナンの旅人たち

S P I C E 5

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ダーナンの旅人たち

【Nコード】

N7050Z

【作者名】

SPICE 5

【あらすじ】

少女チユリカは弟と二人で細々とチーズを作り、市場で売ってその日暮らしをしていた。

ある日店先へ暴れ馬が飛び込んできて、商品をめっちゃめっちゃにされてしまう。

乗っていたおっさんはお詫びに住み込みで手伝いをしたいと言い出しましたが、どうやら只者ではないようで……。

些細な始まりは、やがて国を巻き込む大事件へと発展していく。

1 : チュリカ、おっさんと出会う

夏の乾いた風に乗ってやって来るのは、バザールの刺激的な匂いとむっとするような熱気。

汗や香料に混じって鼻をくすぐる香ばしい香辛料の香りがあたりのお腹を強く動かす。これはきつとカジャブだ。

豚肉を甘辛く刺激的な味付けにしたものをそぎ切りにして、発酵させないパンにバナバ菜やローストしたナッツと共に挟み、たつぷりと胡椒を挽いたそれはこの辺りでは夏に人気の料理だ。冷たい飲み物に刺激的なカジャブはよく合う。おそらくそう遠くないところに店を出しているのだろう。

想像するだけで生唾が沸き、ますます強く腹が鳴った。

「チュリカあ、腹減ったよう」

おそらくさつきから同じことを考えていたのだろう。

傍らに座り込んで一緒に店番をしていた弟のキュウが、我慢できなくなったらしくあたしを見上げて唇を尖らせた。

「そうね。そろそろお昼食べよっか」

答えながらも、そういうものは食べられそうにないなとあたしは内心がっかりしていた。

思っていた以上に売り上げが悪い。

ここウィスプの街のバザールでチーズを出している店は今のところあたし達の他にそういない筈なのに、この調子じゃ一週間分どころか数日凌ぐだけのお金も稼げるかどうか。

とりあえず、キュウに頼んで安い香草入りの固パン 腹持ちも

良く身体にもいいが、味はいいまいちだ　を買ってきてもらい、それにチーズを挟んで水で流し込むことにしよう。

そう決めて口を開きかけた瞬間、

「うおおい、ど、どいてくれええっ」

突然慌てふためいた叫び声と共に、何かがあたしの目の前に突っ込んできた。

「キュウ！」

叫んで思わず弟の上に覆いかぶさる。簡易店舗の支柱や布がガラガラと崩れ落ち、馬のいななく声とともに何人もの怒声が飛び交う。あたしはぎゅうつと目をつむったまま、必死に身を固くしてキュウを抱きしめていた。

神様、あたしはいつ死んじゃってもいいです。だけど弟のキュウだけは、キュウだけは　あ、でもキュウだけ残っちゃったら、その後どうやって生活していくのだろう。牛の世話やチーズ作り、家のこまごましたことなんか、まだ10歳のあの子にはとても　。

「か、神様、やっぱりあたしもっ。どっちも助けてええっ」

「何わめいてんだ」

冷静な声にハッと我に返り、振り向くように顔を上げると、頬が触れ合うほど間近に少年の顔があった。

「へあっ」

普段異性に縁が無いと咄嗟に可愛い声なんて出せない。

驚きのあまり奇声を上げてしまったが、キユウに覆いかぶさったあたしに、さらに覆いかぶさるようになっている彼の体勢から考えるに……おそらく彼は、あたし達を助けてくれた、ということになるのだろう。

「あ、あの……」

「怪我は無いか」

そう言いながら、少年は私の身体から離れた。

むすつと不機嫌そうな顔にどう言葉をかけていいものか迷っているうちに、

「じゃあ」

とだけ言い残し、その少年は去って行ってしまった。

お礼、言えなかったな。あたしは放心状態でそんなことを考えていたのだけれど。

「チュリカあ、重いよう」

キユウの苦しげな声で現実を思い出し、辺りを見回して呻いた。

「……どうすんのよ、これ」

無残、の一言ですむ惨状だった。

棒や布自体は口バで運んで来られる程度のたいして重みの無いものばかりではあったけれど、それらがすべて滅茶苦茶に散乱し、その下で商品はかき回すようにして踏み潰されていた。

おそらくもうほとんどのチーズが駄目になっているのに違いない。

そしてその傍ではふみ潰した元凶であろう一匹の牡馬が、鼻を鳴らしながら興奮したように身体を揺すっていた。

「どっ、どっどっ」

馬を静めようとなだめていた一人の男が、見られていることに気付いたのかこちらを振り返った。そして決まりが悪そうな顔で近付いてきた。

「すまねえな姉ちゃん。」

俺が調子に乗って馬なんか借りたりしなきゃこんなことには・・・
・・・お、怪我は無いようだな。うんうんよかった、俺の日頃の行いが効いたんだな。

まあお前さんの店は潰れちまったようだが、角の端っこだったんで周りに迷惑かかんねえのは幸いだった、はっはっは」

「何笑ってんのよ！あんた、よくもうちの商品全部駄目にしてくれたわね！」

「どうしてくれんのよ！！」

思わず目に涙を滲ませながら、あたしは息巻いた。悔しい、全部が駄目になってしまった。

お金が得られなくなってしまった衝撃もさることながら、丹精籠めて作ったチーズが無残に蹴散らされた拳句簡単に笑い飛ばされたことに、あたしは猛烈に腹を立てていた。

「あたし達がオンナ子どもだからってへらへら笑って馬鹿にしゃがって！」

ダーナン国のイエスタグル・ロウ（『勇敢なる士』の意）なんて、嘘だ！もう何処にも居やしないんだ！」

叫びながら涙が次々に溢れていった。

男は慌てふためいたように手を広げ、片腕に掛けていた袋に手を突っ込んでゴソゴソとやっていたが、やがてしわくちやの汚らしい布の塊を出して私に渡そうとした。

「ほれ、ハンケチだ。

すまねえ、馬鹿になんてちっともしてねえよ。まあ、その、なんだ、俺が悪かった。

「……頼む、泣かないでくれ、俺は女と子どもに泣かれるのには弱えんだ」

女に泣かれるのに弱い。なんだか物語のヒロインのようではないか。

思わず涙を引っ込めて男を見つめると、無精髭のいかつい男はホツとしたようだった。

「うんうん。笑顔でいるのが一番いいのさあ。

子どもが泣くのは父ちゃんに怒られた時だけでいい」

あたしは思いっきり男の頬を引っ叩いてやった。

男は自分をジェイスと名乗った。

なんでも最近仕事を辞めたばかりで、貯めた金が無くなるまで旅でもするかと、何となくここウイスプの街までのらりくらりとやってきたのだという。

「まあ、大金を持ち続けるのは性に合わんのよ。ついパアツと使い

たくなつちまつてね」

それで馬でも借りて移動してみようかと思ひ立つたらしい。

馬はダーナン、いやこの近隣諸国では主要な乗り物だ。

大抵の移動手段が歩く以外にない中、馬を使えば人が数日かかる道もあつという間に移動できる。その為大変に重宝されるのだが、貴重であるが為、貴族以外で所持できるのは金持ちの商人くらいのものである。

そんな中で繁盛する商売が馬貸家と移動定期便だ。

馬貸家はその名の通り馬を一定期間もしくは区間単位で貸す商売で、先払い制である。一通りまとまった金をその箇所での馬貸家に渡し、国に無数に散らばる馬場亭という馬の休息所まで移動した後、そこで組合が共通発行している証文を見せて差し引き精算をする。なかなか金のかかるものなので、主に富裕層の道楽や仕事の早便等で利用されていた。

移動定期便は、馬車が停留所毎に客を乗せるというもので二頭立て馬車と四頭立て馬車とがある。こちらは比較的手ごろなので、主に一般人が利用をしていた。もとは一頭立て馬車に郵便物を運んでいたというのが語源らしい。

「馬なんか使つて何処まで行くつもりだったの」

あたしはジェイスに尋ねながら、無残なチーズの亡骸をせつせとかき集めていた。

過ぎてしまったことをくよくよしても仕方がない、ただ無心に残骸と化した商品を台車に積み上げていくだけだ。

損害は気にしないことにした。というか、この男が本当に馬を使うくらい金を持っているのなら、少なくとも店に出していたチーズの原価くらいぶんどってやれば良い。さっきから横で店の支柱やら

屋根布やらをひとまとめにしている男を見て、あたしはそう考えていた。

「うーん、それがなーんも考えてなくてなあ。まあ、でき心っちゅうやつだ」

呑気な笑顔でジェイスは答えた。

乗ってはみたものの慣れない手綱さばきに馬が苛立ち始め、そのうちジェイスが誤って馬の腹を蹴ってしまったため、暴走して突っ込んでしまったらしい。

話を聞くほどに呆れるが、まあ、金があると気楽に話したり、片付けまで進んでやっている姿を見る限り、人は良さそうだ。

交渉次第では慰謝料も取れないだろうか。

そんなあたしの考えを知ってか知らずか、ジェイスは一通り片付けの手伝いが終わると腰に手をやって伸びをしながら、

「よし、んじゃ、やってくれや」

と、近くにいたボロ服を着た男に呼びかけた。

「へえ、そんじゃ」

言われた男は、台車の中の崩れたチーズをひよいひよいと三つの籠に分類をしていった。

先程ジェイスが探してきたその男は残飯屋といって、食べられるものなら大抵のものを引き取り、微々たる額ではあるが金も払ってくれる。一等から三等まで状態の良いもの順に分けた食べ物、そのまま売れるもの、加工（傷んだ部分を除去したり洗ったり）すれば売れるもの、豚の飼料として売るもの、と状態に応じて分けられる。

崩れたチーズも洗いさえすれば質はいい筈なので、大抵は二等の籠に入れられていた。見ていて辛い光景ではあったが、確かに廃棄するよりはマシだ。あたしは黙って消えゆくチーズを見つめていた。残飯屋が去っていくと、ジェイスは私に向き直り、

「じょうちゃん、本当にすまんかった」

と、深く頭を下げた。

「まあ、起こったことは仕方ないけれど、その分しっかりと弁償していただきますからね！」

それと！じょうちゃん、って言い方はやめて。あたし今年で十七になるんだから」

ジェイスの目がまんまるになった。

「なんだって、こいつあすまんすまん。

おれあてつきり十一、二歳くらいの子どもかと………そんな棒つきれみたいなちっこい体してんだもんなあ。

もちつとこつ、年頃らしくぶくぶくと肉付けしないと」

再び、あたしは思いつきり男の頬を引つ叩いてやった。

1 : チュリカ、おっさんと出会う(後書き)

造単語や特殊設定が入ってきます。

補足はこちらに記述していきます。

(読まなくても大丈夫です)

2 : おっさん雇われる

お腹が空いたとキュウが騒ぐので、あたし達はカジャブ屋で遅めの昼食を摂った。

もちろんジェイスのおごりなので遠慮なくジュースも付ける。

汁気たっぷりでピリツと辛いカジャブは疲れた身体に元気をくれる。ジェイスはうまいうまいと手形の付いた頬を動かしあつという間に三つも平らげ、キュウの感嘆の眼差しを得ていた。

「さて、と」

指に付いた汁を舐め取り満足そうにお腹をさすると、ジェイスがおもむろにあたしの方に向き直った。

「じょうちゃ………あー、ねえちゃんに頼みがあるんだが」

「チュリカでいいよ。何？」

「チュリカ。うん、そのまあ、なんだ」

ぼさぼさにしばった頭をがりがり掻いたり無精髭をさすったり、一向に後を続けようとしなないジェイスに、あたしは段々イライラしてきた。

「もう、何なのよ、言いたいことがあるならさっさと行って。」

あなたのおかげでこっちはやらなきゃいけないことがたくさんあるんだから。

言っておくけど商品台無しにした分はきっちり責任取ってもらうからね。

少なくとも大チーズ一塊につき1トラベはいただくわ。今日持ってきた分の数をかけて、だいたい」

「そのことなんだがな」

笑顔でジェイスはあたしの言葉を遮った。

「実は今の昼飯代で、持ち金すべて無くなっちゃったのよ。

「すまんが、迷惑料は俺の身体で支払うってことで、ひとつ頼むわあ」

「……は、

ハア ツ!？」

あたしの絶叫は昼下がりのバザールの喧騒に虚しくかき消された。

キユウのはしゃぎぶりといったらなかつた。

「おっちゃん」「おっちゃん」と、機材をロバに乗せて帰る道中、ずつとぴょんぴょこ跳ね回りながら彼にまとわり続けた。ジェイスも馬を引きつつ「おう、おう」と、にこやかにそれに応えている。

今日はとんでもない厄日だ……。

後ろで楽しそうに騒ぐ二人の声を聞きながら、あたしは暗くため息をついた。

本日の売り上げは、わずかに1トラベ3ピケノ、それとおっさん。とんでもない大赤字である。お金はともかくおっさんに至っては、むしろ食いぶちが増えただけだ。

神様はどれだけあたしに試練を与えられるおつもりですか。

ぶつぶつと愚痴をこぼしつつも歩き続け、2時間ほどでようやく我が家へと辿り着くことができた。

白い塗装が剥げ落ちた囲いの牧草地、その端に家畜小屋と納屋がひとつずつ、そして脇にある木枠の家が我が家だ。道の周りには更地が続く、隣家まではしばらく歩かなければ出会えない。後ろ手には小さな森が広がり、その奥には脈々とヤルダナ山脈が続いている。いつもより早い出発でまだ日は落ちきっていなかったので、とりあえずキュウには先に家畜を小屋に入れてくるようにと言った。

「ジェイスには、案内がたら荷物をしまってもらってから」

言いながら施錠を空けようとして、あたしは気付いた。

開錠している。

急いで戸を空けて中に踏み込んで、あたしは呆然と立ちすくんだ。

「どうしたあ、チュリカ」

戸の外からジェイスの声が呑気に響く。

「チーズが……」

保管していた熟成用のチーズが、すべて棚から消え失せていた。

顔から血の気が引くのがわかる。

カタカタと膝を震わせながら、

「なんで。なんで全部無いの……」

あたしは棚や中に下げていたチーズがあつた筈の場所を、何度も確認して回つた。

探しても探しても、チーズはひとかけらも見つからなかつた。

「ど、どうしよう、どうしようどうしようっ」

「まあ、チュリカ、とりあえずは落ち着こうや。

あたふたしたって、何の策にもならねえしなあ」

他人事のように呑気な声のジェイスに、あたしは猛烈に腹を立てた。

「そりゃああなたには関係ないから何とでも言えるでしょうよ！

金も払えず付いてきただけのおっさんのくせに、偉そうなこと言わないで！

ここにあつたチーズは、大事なものだつたんだから！父さんの、父さんの」

そこまで言いかけて、ハッと気付いてあたしは口をつぐみ、下を向いた。

駄目。これ以上言っちゃ駄目だ。

瞼を固く閉じたまま拳を握りしめ、深呼吸を数回繰り返すうちに、何とか少しづつではあるが落ち着いてきた。壁際の背無し椅子に座り顔を手で覆う。……ああ、本当に何て厄日なんだろう。

「チュリカ」

ジェイスが優しく呼びかけた。

「ひとつずつ、順に確認していこうや。

大丈夫、何とかなるさあ」

「・・・・・・・・・・」

「まあ、確かに俺は、金も払えず付いてきただけのおっさんだがなあ。

ほら、話し合うことで生まれ出る知恵もある、っていうだろ」

「・・・・・・・・・・」

「じゃあ、ゆつくり整理してみるから、答えていつてくれや。まず、無くなったものについてだ。

お前さん家にあったチーズは、ひとつも無い。間違いないな？」

「・・・・・・・・・・」

「チュリカ」

「・・・・・・・・・・うん」

「よしよし、良い子だ。

次。それ以外に、無くなったものはないのか。たとえば、金や貴重品」

「！」

あたしは急いで立ち上がると、奥の炊事場まですっ飛んで行って、ジャガイモを詰めた樽を漁った。

次から次にじゃがいもを飛ばしながら、必死で祈る。お願い、お願い！

樽の底が見えそうになる頃、あたしの手は小さな木箱を掴んだ。すぐに引き上げ、右のおさげから髪留めを抜くと、内側にはめ込むように隠していた小さな鍵を取り出して鍵穴に差し込む。ピンとはぜたような音がして、箱の蓋が開いた。

よかった、中身は盗られていない。

あたしは安堵の溜め息をついたが、次の瞬間ハッと我に返りジェイスの方を見た。

ジェイスはにこにこしながら「無事みたいだな」と言った。

あたしが気まずい思っている、

「ああ、大丈夫、大丈夫。俺は金目のもんに興味はねえんだ。もし不安なら、いつでも隠し場所変えてといていいぞ」

と、気にしない風でのんびりと言った。

あたしはちよつと迷った挙句、とりあえず前掛けのポケットに小箱をねじ込んでおくことにした。隠し場所は後で考えよう。

「家の中は他に荒らされたような形跡も全くない。

さあて。これで分かったのは、盗人は金に困ってんじやなく、元々チーズのみが目的だったということだな。しかも大量に。

チーズ職人による販売阻止か、はたまた怨恨か。チュリカ、思い当たる節はあるか」

「販売阻止だったって、あたしの出してるチーズの量も質もたかがしれてるし、怨恨といっても……ここ数年に関しては、特にこれといってないと思う。

ずっと人に関わらずに生きてきたから」

「ふむ、そうか。錠はきちんとかけていたか」

「もちろんよ」

「人通りもほとんど無く、隣家までもかなりの距離だな。裏手には森と山しかない。ということは、このことから結びつく犯人像は

」

ジェイスったら、なんだかちょっと頼もしいじゃない。

あたしはぼさぼさ頭に無精髭のおっさんを、ほんの少しだけ見直し始めていた。

八つ当たりしたのに怒らないし、冷静に考えながら手助けしてくれる。

うん、役立たずなんて言っただけ悪かったな。

「犯人は、おそらく」

重々しい声でジェイスが続ける。

「手先の器用な、森の野ネズミ達だなあ」

前言撤回。

馬があるのって本当に便利だ。

警邏台までジェイスがひとつとびで行ってくれたおかげで、半刻もしないうちに警邏士を呼ぶことができた。

「被害時よりそのままの状態か」

一通り被害状況を調べると、警邏士は被害を書面に記録しながら質問をしてきた。

「はい。……あつ、じゃがいもが散らばっているのは私がやりました」

なんでまた、と顔をしかめつつも警邏士は追記した。

「まあ、一応本件の記帳はしておくが、まず犯人は見つからんと思っておけ。

こちらもちーズなんぞ盗むこそ泥のために、いちいち時間をさく暇は無いだ。金目のものを盗まれなかっただけマシと思うんだな。全く、いちいち警邏に迷惑をかけやがって。親が親なら子も子だな」

あたしの後ろに隠れていたキユウが、服の端をぎゅうつと握りしめた。

「て、訂正してください……」

震え声であたしは言った。

「最後の言葉……訂正してください。あたし達は何もしていませんし、親はこの件に関係ありません。

それに……父は言っていました。自分は何も知らないと」

「うるさい、恥知らずどもめ」

吐き捨てるよいに言い、警邏士は今度はジェイスの方をちらりと見てにやにやしながら続けた。

「ふん、男を連れ込むことを覚えたか。

馬を持っているってことは、おおかた賭博か何かで一儲けしたんだろう。いい金づるを手に入れたじゃないか」

言われた当のジェイスは「どうも」などと言いながら香煙草をくわえてへらへらしている。あたしはカツとなってジェイスを指差しながら叫んだ。

「こんなむさ苦しいおっさんなんて、頼まれたってごめんよ！第一こいつは無職で文無しの役立たずなんだからッ！」

ひでえなああと呟くジェイスは無視し、あたしは警邏士に向き直って言った。

「民の為の警邏が聞いて呆れるわ。何もする気がないのなら、とつとと帰って下さい」

「ガキが調子に乗るんじゃねえ。俺を誰だと思っているんだ」

口調を荒げて男が凄みだした。

「警邏は王法の盾、俺に盾突くってこたあ王に齒向かうのと同じだぜ。」

身寄りも無え罪人のガキなんぞ、俺の報告ひとつで簡単に首が飛ぶぞ」

あたしは、黙ってうつむいた。

男の言う通りだった。

警邏台は民の為という名目のもと、王政の秩序を守る為に全国各地に設置されている。

王を含む十二人の優れた治者が『剣』と揶揄されるのに対し、警邏士達はその人数と法を守る役割が故に『盾』と言われている。剣と盾の双関係によりダーナンの国政は機能しているのだ。

こんな地方の下っ端とはいえ、警邏士だという事実には違いなく、逆らえば即ち王政への反抗とみなされ、あたしとキュウの命など簡単に踏み潰されるのは間違いない。

あたしが黙ったままなのに気を良くし、男は近付くと、あたしの顎をぐいと持ち上げて下卑た笑みを浮かべた。

「ふん、身体は鳥ガラだが、ツラはまあまあ見られるようになってきたな。

男を覚えたんなら、さっそく今夜にでも俺のことも満足させてもらおうか。なあに、悪いようにはしねえよ」

悔しい。悔しい。最低な煽りへの憤りで視界が滲む。

だけどこいつに逆らえば……駄目、キュウのことだけは何に変えても守るって決めたじゃない。

あたしが抵抗しないとわかると、男は「来い」と乱暴に腕を掴んだ。そして、そのまま意気揚々と戸口を出ようとし 派手な音を立ててすっ転んだ。

「おっと」と

つられて転倒しかけたあたしの身体を、ジェイスがすくうように支えてくれた。

「戸口は出っ張りがあるから、ちゃんと前見て歩かなきゃ危ないぜ。

おっさん

「うるさい！」

お前が言うな、とわめきながら、男は戸口をまたごうとして、またもや盛大に転んだ。

「ほらなあ、落ち着けて。おっさん」

茹でダコのようになった警邏士に声をかけ、

「ところで、あいつのことなんだが」

と、ジェイスはのんびりと外につないでいる牡馬を指差し、続けた。

「どうして俺みたいな奴が乗りまわしているんだか、おっさん、知りたくはないか」

「うるさい！お前は馬鹿か！どうでもいいわ！」

「聞いた方がいいと思うんだがな」

細長い香煙草をくわえたまま器用にゆっくりと煙を吐くと、ジェイスは一言、

「トウル・ヤーンの監査」

と言った。

途端に、警邏士の動きがぴたりと止まった。

そのままそろそろとジェイスの方を見て、乾いた笑い声を立てる。

「ははは……出鱈目も大概にしる、馬鹿馬鹿しい」

「まあ、こんな身なりじゃあ信じちゃくれなйдらうね。そこが狙いなんだし」

頭をがりがりとかきむしりながらジェイスは言い、妙に落ち着いた態度のままじつと警邏士を見つめた。男は段々とうろたえだし、

「信じねえぞ、俺は信じねえ。そんな汚ねえ格好した監査がいてたまるか。」

しよ、証拠だ証拠、監査をかたるからには証拠を見せやがれ！嘘ならガキ共々まとめて詐欺罪で処分だ！」

とわめき散らした。

「ほい」

ジェイスは胸から何かを取り出すと、警邏士の前にかざした。革紐に通したそれは銀色のプレートで、中には紋章と数字が刻み込んでいる。

警邏士の顔から一気に血の気が引くのが傍から見ててもわかった。

「あ、あ、あ……」

「悪いが、今は休暇中なんだ。今から言うことを守ると約束すりゃあ、一連の出来事は忘れてやる。」

今すぐ出て行き、二度とこの家に近付かないこと。俺の存在を周りに漏らさないこと、この二つだ」

休暇中に面倒臭い処理はしたくねえからな。のびをしながら呟く
ジェイスの言葉に、がくがく震えていた警邏士は、びいんとばねの
ように背を伸ばし、

「ととと、とんだ御無礼を致しました！申し訳ありませんッ！
無論監査殿のことは誓って他言致しません！し、失礼します！」

と叫ぶと、最大級の敬礼をし、文字通り転げるようにして去って
行った。

呆然としているあたしとキュウに、ジェイスは

「さあて、腹減ったな。晩飯にしようや」

と、一人呑気な声をあげ、にやりと笑ってみせたのだった。

2 : おっさん雇われる(後書き)

補足

警邏士^{けいろし}

警察のようなもの。

王政下において国の隅々まで法が浸透するよう、人口の割合が等間隔になる位置を計り、そこに警邏台(詰め所)を設置。階級毎に担当の警邏士が異なる。

警邏の基本理念は「法は民の為に有。倫理と秩序を尊び、王政の繁栄を助長す」である。

しかしながら権力を私欲の為に用いる警邏士も後を絶たない。地方になるほどこの傾向は如実。

戦争になれば担当士は出兵もする。

武勲により上級階級の担当も可能。

非常に優れた警邏士は、難度の高い試験を受け王宮直轄の警邏宮に務めることも可能。

通貨

使用できる単位が身分によって決まっている。

リルー(屑銭)

ピケノ
トラーベ
サモア

まで平民が使用可。(低価値順)

一通貨単位辺り20まで数えられ、それ以降は次単位に繰り上げる。

(例：20ピケノ＝1トラーベ)

ただしサモアより上の単位は貴族以上の使用となるため、サモアに繰り上げ換金の上限はない。

3 : おっさん、トウル・ヤーンを説明する

「あんたって一体何者なの」

遅くなった夕餉の席で汁椀を渡しながら、あたしはジェイスに尋ねた。

今夜は、牛の乳を使った三色団子汁だ（じゃがいもと麦粉、すり潰した人参と麦粉、葉野菜と挽き肉をそれぞれ練って丸めたものが入っている）。いつもならば市場に出た日の夜は普段より豪華な献立となるのだが、今は贅沢など言っていない。支出を抑えなければ微々たる蓄えなどあつという間に無くなってしまう。ましてや

あたしはもりもりと匙を動かす男を眺めて溜め息をついた
大食漢の居候がいるのだから、質より量となるのは当然だ。

まあでも、何だかよくは分からないが警邏とのやり取りからしておそらくジェイスは高位の役人ということなのだろう。もしそうであれば助けてもらったのは有り難いが、一刻も早くここから出ていってもらいたい、借金を返してもらわねば。

ジェイスはあつという間に椀を空にし、物足りなさそうにあたしを見た。そして、そこで初めて気付いたかのようにきょとんとした顔をして、

「あ、今の、俺にきいたの？」

と尋ねてきた。

「他に誰がいるのよ」

「はは……。ん、俺が何者か、かあ。そうだなあ、無職の文無し、厄介者の居候、ってところか」

「自虐的な冗談はいいから」

あたしはジエイヌから腕を受け取り、お代わりを注いでやりながら促した。

「さっき、警邏に何か言っていたでしょ。ほら、トウ、トウ……」

「トウル・ヤーン？」

「そう、それよ。そのトウル何とか。名前出ただけで警邏が慌てて態度変えたってことは、あんた本当はお偉い役人か何かなんですよ。」

休暇がどうのこうのと言ってたけど、つまりあたし達に嘘ついてたってことよね」

「ああ、あれ。もちろん嘘だよ」

「やっぱり」

あたしは口を尖らしかけ、慌てて引っ込めた。拗ねた口調に聞こえなかっただろうか。

「おつとおチュリカ、何か勘違いしてないか。嘘つてのは、警邏に言ったことの方だぞ」

「はあ？」

どう説明すりゃあいいもんか　ぼりぼりと頭を掻きながら呟くと、ジエイヌはさじを啜えて腕を組み、しばらく明後日の方角を見

ながらギョロギョロと椅子を浮かすようにして揺らしていたが、

「……やっぱひ、はぎめから、へくめいひかほつが、いいかおなあ」

と呟くと匙を口から離し、唐突に、

「チユリカ、お前さん『月呼び名』は分かるよな」

と話しかけてきた。

「学が無いと思って馬鹿にしてんの」

「いやあ、これが少なからず関係してんの。まあ、順に言ってみ」

「……ウイス、ペア、スウ、ヌム、サー、ヤーン、メア、スイー、リツ、ハチ、ミィ、ロウ」

「御名答」

「こんなの、言えない人探す方が難しいでしょ」

ムスツとしてあたしは言い、「まあそうだがな」とジェイスも同意した。

ダーナンには昔から、1月をウイス、2月はペア……といった具合に月毎の通り名があり、これらの総称を『月呼び名』という。

月呼び名は時を表す刻盤にも使われており、また、刻盤の頂点に位置するロウを北として方位を表す際にも用いられたりもする。多国間でのやり取りの中で利用されることはほぼ無いが、国内のみに関していえばいまだにこれらが常用されているのが実態だ。

月呼び名の由来は、その昔ダーナンの祖王に仕えたとされている聖霊達の名よりきている。彼らはそれぞれに秀でた能力を持ち、その力を持って王を補佐し、建国の礎を築いたという。

建国より五百年以上が経つというのに、今だこの呼び名が廃れないのには理由がある。

聖霊名を日々口にすることは、即ち国を敬い己の徳を積むことへとつながり、ひいては死後の天上審判の際に高位階へと上がる事ができると信じられているためだ。

また、それぞれの名が持つ意味を誰もが知っていることから、名付けに使用されたり慣用句に使われたりと、何かと使い勝手が良いことにも一因がある。

「さて、次にチュリカ、紙とペンを貸してくれないか。

ここからはおそらくお前さんの知らない話になってくるだろうしなあ」

ジェイスはあたしが渡した帳簿代わりの紙束から一枚をむしり取ると、紙一杯に大きく円を描いた。

そして頂点から右回りに1、2、3……と刻盤のように数字を入れ、それぞれの下に月呼び名も順にロウ、ウイス、ペア……と書き込んでいった。

「これはなあ、『日輪環』ともいうんだが」

そう言いながらジェイスは中央にポツツと点を入れ、今度はそこを起点にロウ（1、2）の左横とサー（5）の左横までそれぞれ線を引いた。

円の中身が二つに分かれる。

「この二つに分けた月呼び名には、それぞれ正式な前称が付いてい

るのは知ってるか。

『ティ・グ』と『ダ・ラ』っていうんだが」

「刻に付けるやつのことでしょ」

ダーナンでは、刻を表す際に前称を付けることがある。

ティ・グ・ウイス（1時）、ダ・ラ・メア（7時）といった具合に。1～5時・12時にはティ・グ、6～11時にはダ・ラがそれぞれ付く。

ちなみに、日の始まりから短針が二周目に入る際には、さらに付加する形で末尾にそれぞれ『ティ』『ダ』が付く。（例：ティ・グ・ウイス・ティ（13時）、ダ・ラ・メア・ダ（19時））

ただし、実際に前称をつけて言う人は今ではほとんどいない。改まった場や書簡類、契約書等公的な場合に使用される程度である。

「おう、それだ。こいつはな、もともとは聖霊の性別を表す用語からきてるんだ。

ティ・グは男性、ダ・ラは女性。

でな、チュリカ。それぞれの対極する数字同士、すべてが男女で対となっているのが分かるか。

男性のウイス（1）の対極に女性のメア（7）といった具合に」

「あ、ほんとだ。へえ、まるで夫婦みたい」

「おっ、いいところ突いてるぞチュリカ。

さあて、こっからが本題だ。

『日輪環』という言葉にはな、頂点位置にいるロウが『あまたを照らす神と等しき位置』という意味合いも含まれているんだ。

つまり、ロウは『ダーナン王』のことでもあるのさ」

「へえ」

「そして、ロウである国王以外に国を動かしている11人の最高官もまた、それぞれ月呼び名にちなんだ官職名がつけられているんだ。ダ・ラには男、メ・アには女の最高官が入り、対極にある月同士二人一組として各分野の政事に関わっている。政は夫婦まつりごとめあとで取り組めというのが、この国にある古くからの縛りなんだ。

もちろん、一般的意味での夫婦である必要は無いんだが。さあ、ここまでで何か気付いたことは無いか、チュリカ」

「……ジェイス、あなた何故こんなことに詳しいの」

「や、まあそれは後でちゃんと話すから。ほらほら、今はこの図を見て気付いたこと言うのが先だ」

にやにやしなからジェイスが促す。

気付いたことって言われても……困惑しながらも紙に描かれた図をじっと見ているうちに、あたしはある月に目を留めた。

「ねえ……そう言えばすべてが対と言っていたわよね。

じゃあ、ロウの対のヤーンってどういう存在なわけ？やっぱり王様の対の女性だから、お后様にあたるのかしら。

……あつ、でもさっき、最高官は11人いるって言っていたわよね。

でも二人一組ってことは……」

ぶつぶつ呟くあたしに、ジェイスは嬉しげに大きく頷いてみせた。

「そうなのよ！そこなの、俺が言いたかったことの足がかりは。

いやあチュリカちゃんってば、やればできる子」

あたしは大きな手でポンポンと、優しく頭を叩くようにして撫でられた。

「子供じゃないって言ってんでしょ！」

「まあまあ。んでは、核心に入っただろうか。」

ティ・グ・ロウである王にも、もちろん、対であるダ・ラ・ヤーンがいる。

彼女の存在は、いわば王の影だ。

国を広く見渡す王に対し、彼女の役目は小さなほころびを繕うことにある。滞りなく国政を行き届かせるために不正を取り締まるのが彼女の仕事だ。

そしてその手段の一つに警邏台の抜き打ち監査もある。不穏な動きや横領等を見つけたことがあれば、王の代わりにいかなる相手であろうとも即座に処分できる、唯一かつ絶対的な権限を持っているからなあ。警邏がもっとも恐れる相手でもあるのさ。

で、しごく簡単に言えば、その彼女の組織全体及び部下達のことを『トウル・ヤーン』っていうわけだ」

そして、と言いながら、ジェイスは胸元に手を入れてこそこそと探り、中から銀色のプレートを取り出した。

「これがトウル・ヤーンである証、王家の紋章を組み込んで作られた称号符だ。

実はなあ、警邏がトウル・ヤーンを恐れるもう一つの理由が『顔が無い』という特殊性にあるんだ。

ダ・ラ・ヤーンを含めこの組織に属する者は今までほぼ全員、王や最高官達以外には顔も素姓も知られていない。

逆にいえば、この称号符をかざす時のみが、トウル・ヤーンが権

力を行使できる時であるともいえる。

就任者は誰か、構成人数はどの程度か、何時如何様に動くのか。王への忠誠と頑なな結束により、その詳細は設立当時からほとんど漏らされていない。まあ、表立たない秘密裏な組織だからなあ、ダーナンの一般市民にはその存在すらも知られていないだろうよ。

だが、国政に関わる者やある程度の権力者ならば、誰もがその名を知っているはずだ。彼らが分かっているのは、『トウル・ヤーンの裁きを拒否すれば、此即ち王への反逆罪と見なし、待つのは極刑のみ』ということだけだが」

ひとしきり話し終わると、ジェイスは椅子ごと身体をずらして脇にあった水瓶から直接ひしゃくで水を飲んだ。

「……ふう。長々と説明するのは、性に合わんよ。他に言い忘れたことあったっけか……」。

ああそうだ、彼らの身元が割れない理由の一つに、動く時は常に仮面を着用しているっていう話もあったな。

ダ・ラ・ヤーンですら、王と二人きりの場でしか仮面を取ることはないらしい。

ちなみにヤーンは、日輪であるロウとペアであることから、私生活で婚姻をすることは無いんだ。常に黒い装飾で身を固めていることから、『黒衣の尼將軍』とも呼ばれている。

うん、俺がチュリカに説明できるのは、ざっとこんなところまでだな」

少しの間、沈黙が流れた。キユウが無邪気に団子をいじる、カチャカチャという小さな音だけが響く。

「……なるほどね。言っていることは理解できたし、あの警邏が逃げて行った理由にも合点がいったわ」

けれど、まだもう一つの説明が済んでいないわよね。

これだけのことを知っていて、なおかつ称号符を持つあなたが、一体何者なのか、ってことの説明が」

あたしには、学歴が無い。

いや、あたしに限らず一般国民で学舎で学ぶという金のかかる贅事を受けられる子供は、そうはいない。

大抵は家業を継ぐため手伝いに明け暮れる日々を繰り返して大人になるため、読み書きもできない。ただ、有り難いことに、あたしは昔学舎をしていたという父からある程度の読み書きや算術、学舎で得られる様々な知識を自宅に居ながらにして受け育つことができた。

だから分かる。ジェイスが今あたしに話して聞かせたことが、片田舎の学舎で学び得る知識ではないということくらい。

「何者も何も、無職者でえす、で、いいじゃないの。だめ？」

少々面倒臭そうにジェイスが言った。

「俺……腹ふくれたし、長々話したし、もうオネム……」

「戯言は借金返してから言いなさいッ！」

バンと食卓机を叩いて立ち上がりながら、あたしは凄んだ。

「あんと関わってから本ツ当に散々な一日になったわ！」

今、うちには市場に出すチーズはひとつかけらも残っていないのよ！金も無い、品も無い、明日の生活も分からない！そこに勝手にこのこと、借金持ちのタダ飯食らい！

いい加減自分の立場分かんないよ！あんたがそのトウル何とか

だってやつなら、さつさとお金を工面して頂戴！それができるかどうかで、今後のあたし達の運命も大きく変わるんだからねッ！」

けたたましく怒鳴り立てるあたしの剣幕に、すっかり圧倒されたらしく、ジェイスは頭を抱えて小さくなっていた　いや、なるうとしていたが、がっしりした体格のため大して縮こまれずにいた。

「わかりました……チュリカさん……お話ししますよ……」

げっそりと疲れきった顔で、ジェイスは口を開いた。

「俺がトウル・ヤーンじゃないのは、本当。

「逆なのよ……元警邏なの、俺」

「……は？」

「この称号符はね、ニセモノなの。

実際の称号符がどんなもんか知らないと、意味ないでしょ。こうした精巧な模造品がいくつかあって、新人警邏の講釈に利用したりするわけ。

ほら、見てみな」

ひよいと渡された立派なそれをは、一見すると重たそうなのに、実際に手にしてみれば驚くほどに軽かった。彫り込まれた装飾は精巧であるが、はめ込まれている宝石類は　。

「ああ、それは全部ガラス玉だ、よくできているだろう。一応きちん和本物を模して作られてあるんだけどね、本物を横に並べりゃあ、違いは歴然らしいぜ。

大体本物なら、裏に隠し細工と担当者名、それに通し番号が入っ

ているそうだし」

肩をすくめながら決まり悪そうにジェイスは言い、あたしはへなへなと力無く椅子に座りこんだ。

警邏だったなんて。よりによってうちにやってきたこのおっさん、あたしがこの世で一番嫌いな、警邏だったなんて。

「あのさ……一応、元、だからね。

元・警邏」

さっきのあいつやな奴だったしさあ……、チュリカは警邏のこと嫌ってそうだったしさあ……、だから言いたくなかったんだよ。追い出されたらたまらないというように、ジェイスは食卓機の端をひしと掴んで、しおしおと弁解をしている。

「出て行って。今すぐ」

冷たい声で、あたしは男に言った。

3 : おっさん、トウル・ヤーンを説明する(後書き)

「こゝ、読むの相ッ当面倒だと思ひます、すみません！」

後々の展開に関わってくる情報なため無理矢理説明させています。
なんとなくく目を通していただければ。

4 : チーズ作り

目覚めると、戸口や押し上げ窓の隙間から青白い光がうつすら漏れ初めていた。

あたしは慌てて寝台から身を起こし、作業しやすい服に着替えると、顔を洗って手早く髪を編み込んだ。手ぬぐいを持ち、まだ暗い部屋の中を手探りで移動しながら戸口を開く。

宵の残る夏の朝は心地良い。朝露の絡む草を踏み締めながら裏口に続く家畜舎へ入ろうとして、あたしは入口の門かんばんが外れていることに気が付いた。音を立てないようにして大戸を開き覗き込むと、干し草の山の中腹にある大きな塊が目に入った。油っけのないぼさぼさの金髪が古毛布の端から飛び出し、地響きのようないびきに合わせ揺れている。溜め息をつきながらあたしはその小山に近付いた。

(まあ、こうなることは分かっていたんだけどね)

自分と同じ麦穂色の髪も一緒に覗いているのを、じっと見つめる。昨夜ジェイスが肩を落として去った後すぐ、裏口からキュウがそっと出ていったことには気付いていた。

この子は昨日会ったばかりの相手だというのに、もうすっかりこの男に懐いている。羨ましいくらい素直に。

あたしとは逆だ。

両親を失って三年、差し伸べられる手も訪れる人も無く、それでいいと自分に言い聞かせながら働いてきて。あの時と同じ思いをするくらいなら、初めから人と関わらなくていい、信じなくていいと意固地になっているあたしとは、まるで逆。

キュウが寂しい思いをしていることは分かっていた。けれどこうして出会ったばかりの相手にしがみつくようにして寝ている姿を見ると、あらためて胸が痛む。まだ甘えたい盛りなのに手伝いばかり

強要させ、遊び相手も満足にしてやれていなかった。

もう少しだけ、様子をみてみよう。あたしは二人の寝顔を見ながら、密かにそう決めた。

「ほら、起きなさい」

何度かジェイスの肩を揺すってみたが一向にいびきが止む気配が無かったため、あたしは彼の耳元を両手ですっぽりと覆い（大きな音で家畜を刺激させないためだ）、思いつきり、

「いつまで寝てんのよ!」

と怒鳴ってやった。

うめきながらよろよろと耳を押さえるジェイスに、

「顔を洗いなさい。キュウはそのまま寝かせてて」

と告げて手ぬぐいを渡し、あたしは家畜舎の掃除を始めた。

やがて、ふらふらした足取りでジェイスがやってきた。

「あー……耳が……」

とぼやきながらも、きちんと顔は洗ってきたらしく、濡れた手ぬぐいを首にかけている。

「はい、これ」

あたしは巨大な干し草搔きをジェイスに渡した。

「あんたが寝床の干し草を集め、あたしがその後の掃除をする。全部終わったら牝牛に牧草をあげるから」

「うーす……って、チュリカ。」

それって……俺がここにいてもいいってことが」

「話す暇あったらさっさと手を動かす！

別に今すぐ出てってもらって構わないのよ。お金さえ返してもらえれば」

「やります、やります！ガンガン働かせていただきます」

しばらく黙々と掃除が続いた。わっしわっしと掻き棒を使うジエイスの逞しい腕を見ていると、あたしは内心助かったと思わずにはいられなかった。キュウと二人だけで家畜達の世話をし、チーズを売っていくのは、いくら懸命にやっても生きていくのに精一杯な状態だ。こんな時、あらためて男手のある有り難さが見に染みる。

いつもよりずっと早く掃除が終わった。

そうこうしているうちにキュウも起きてきたので、牝牛や山羊達を反対扉から放牧地へ連れて行かせるよう頼んだ。残った乳のである牝牛と山羊達には、しっかり栄養を取らせるために新しい牧草等を与える。食べ終わる頃合を見計らって、次は搾乳だ。

「ほら、ここ座って」

あたしは一匹の牝牛の横に椅子代わりの木箱を起き、パンパンに張った乳房の下に桶を置いた。

「この子はおとなしいから練習にちょうどいいわ」

ジェイスは牛の腹の傍に座り、おっかなびつくりといった様子で乳首を掴んでやわやわ揉み出したが、しずく乳しか出ない。

「あれえ」と呟きながら悪戦苦闘する様をしばらく眺めていたが、放っておくのも牛が可哀想だと思い、正しい搾り方を教えてやった。

「きちんと乳首を正しく持って。」

つまんだ親指と人差し指から順に、下に向かって手早く指を動かすの

しばらく練習するうちに、ジェイスはシャツ、シャツと勢いよく音を立とながら上手に乳を搾れるようになった。樽に溜まった乳からは湯気がたちのぼり、細かな泡がぶちぶちとぶつかりあう。

最後の牝牛の搾乳が終わると、ジェイスとキュウに山羊の方は任せ、あたしはすべての乳桶を家の中へ運び込んだ。

作業室に入り、大釜戸に火を起こし、そこに巨大な鍋をかけて搾りたての乳を注ぎ入れる。弱火で温めるうちに乳の表面に薄膜が張ってきた。その膜を丁寧に串ですくい、こし布を張った大椀に溜めていく。

後でこれに塩を混ぜ、水気をきって押し固めるとひとつのチーズになる。

次に、レモンの果汁を搾ったものを同じ鍋に入れる。

かき混ぜていくうちに、乳が分離して凝集した状態の白い粒と透明の汁とに分かれるので、鍋を粗いこし布に通して分離させる。この白いチーズの粒は、そのまま売れるものと、うらごしして練るものとに分けておく。

最後に、余った透明の汁を鍋で沸騰させていくと、ふわふわした白いものが浮いてくる。これをざるですくいあげ、少し水をきるとほんのり甘い淡泊なチーズができた。

とにかく今は、手早くお金を稼がなくてはならない。

本当は熟成させたり子牛の胃袋にある酵素を使ったチーズの方が

高く売れるが、それらは金と手間と時間がかかる。しばらくは手輕にできる新鮮なチーズを作り、その日のうちになるだけ売っていく方針で、今の危機を乗り切っていかなければ。

山羊の分が終わったら、ジェイスに頼んで馬を出してもらおう。ああ、でもまたいつものようにあまり売れないようなら、日持ちしないこれらは無駄になってしまう。

あたしはチーズを練りながら、今日のバザールのことを案じていた。

「俺が行ってくるわ」

さも当たり前のように飄々とジェイスは言った。

「ちょっとまって、市にはあたしも行かなきゃ。

場所取りだの販売だのって、あんた、どうせやったことないでしょ」

「大く丈夫だって、チュリカ。ちんたら習うよりとりあえず慣れろ、これ俺の常套句ね。

こつ見えてもカンはいいい方なのよ」

「………あんた、売り上げ分ちよろまかして、そのまま逃げるつもりじゃないでしょうね」

「んなことしないって。もちつと信用しなさいよ」

だって俺、ここを出ていったところで何の当てもないしい、俺義理人情にあっついしい。

そんなことをうそぶきながら、ジェイスは馬でバザールへと出かけていった。麻の荷袋三つを鞍に付けて。

ゆらゆらと揺られながら呑気に出発したのだが、その姿は丘を越えた向こうにあっという間に消えてしまった。

「やっぱりうまって、はやいなあ……」

キユウが名残惜しそうに馬が去った方角を見つめている。

本当は一緒に乗せてもらいたかったのだろう。口に出して言えばよかったのに。そう思いつつもあたしは黙っていた。もちろん、昨日出会ったばかりの男が信用できないという理由が大半を占める。

しかしほんのわずかではあったが、あっという間に他所者に懐いてしまった弟にもやもやした思いを抱いてしまったのも事実だ。

「……さって、あの男が帰ってこないなら、それはそれでいいわ。

とりあえずやることはたくさんあるものね。頑張りましょ、キユウ」

あたしが腕まくりしながらそう言うと、あわててキユウも頷いたのだった。

あたし達は森へ行き、ジュウムの実とココバの木の種をそれぞれ背負った籠に入るだけ詰め込み、シヨウバツタのツルを数本切って戻ってきた。

まずはジュウムの実から痛んだ粒や未熟果を取り除き、それから豆粒ほどのハート型の実についた軸をひとつひとつ丁寧につまみ取っていく。これが地味に辛い。しばらくやっているとも目と首が痛く

なつてくるので、時おり外の家畜の様子を見に行ったりして休憩を挟みながら何とかすべて取り除いた。

水で洗ったジュウムを専用の鍋に入れかき混ぜるあたしの後ろで、キュウは手際良くココバの種の外皮をペンチで割っていく。ココバの種の中身を干したものは肺の病気に効くとされていて、薬師店で買い取ってくれるのだ。

ジュウムの汁がクツクツいいだしたところへ砂糖を加え、アクを救いながらさらに煮詰めていく。そうしてキュウがすべてのココバの種を割り終えたころ、ようやくあたしのジャム作りも終わった。

真っ赤に染まった熱いジャムの中で、小さな桃色のハートがたくさん浮かんでいる。ジュウムのジャムは、見た目が可愛らしくて人気があるのと作るのに手間がかかるのとの理由で、菓子店などに持ち込めば大抵即買いしてくれる。

昼食代わりに乳清に蜜を混ぜたものを流し込み、一息つく間もなく今度はシヨウバツタを手を取った。これを編んだリースは縁起物として婚前家庭の戸に飾られるのだ。

ジェイスは思っていたよりずっと早く帰ってきた。

まだ日が落ちるそぶりもないうちから外でカポカポと蹄の音が聞こえてきて、キュウは脱兎の如く飛び出して行った。あたしはわざと扉に背を向けて座り、リースを編み続ける。

「うーす、帰ったぞー」

低くのんびりと響くお馴染みの声がしたが、あたしはさも忙しいといったふうには熱心に作業を続けた。

ち、ちりり。

かすかな音が聞こえたので思わず振り返ると、ちょうどジェイスが玄関扉に小さな鐘を取り付けているところだった。透かしの入っ

た、シンプルながら可愛い釣鐘だ。

「や、土産さ。戸口の鐘は邪気を払うっていうから」

「……………どうしたの、それ……………まさか売り上げから」

「大々丈夫、これは客からのもらいもんだから」

にこここしながらジェイスは答えると、腰に下げていた巻き財布を取り、中身を机にざらつとあけた。

「完売したぜ」

1 : ぎんぎら屋敷のギョソカ

ウイスプの中心部にあるその屋敷を知らぬ区民はまずいない。

貴重な模様混じりの白陽岩を組んでできた外壁には同一人物の顔が等間隔に彫られており、その輝く様を見れば毎日徹底的に磨かれていますと分かる。

門柱自体にも金で塗りたくられた巨大な彫像、目には左右合わせで計四つの大型金剛石がはめ込まれており、盗まれることのないように常に複数の警護番が目を光らせている。

その門より中に入ったことがあるものは、皆影で口を揃えてこう言う　あれは、『ぎんぎら屋敷』だ、と。

「おっほほう、レイラちゅわん、どこにいるのかのう」

その名の通り悪趣味な豪邸をどたと走り回る、恰幅の良い男が一人。

どこかのうここかのうと連呼する喜色満面のその顔は、屋敷を取り囲む彫刻の顔を数度叩きつけたものと同様である。

「ワシが見つけるまで出てこないつもりじゃな。ほっほ、愛いやつめ。

「ここか、ほれ、ここか」

男は長椅子の裏や掛け合わせの飾り布の間等、おおよそ人が隠れられそうな場所を片っ端からごそごそ探し回るが見つからない。とうとう彼は音をあげた。

「レイラちゅわくん、悔しいがワシの負けじゃ。出てきてくれえい」

はい、と小さな声がして一人の使用人が静かに姿を見せた。

先日入ったばかりであるこの白縁眼鏡におさげ髪の女が、目下のところこの男の大のお気に入りだ。

「ふおほほう、一体何処に隠れとったんじゃ。おかげで今宵もワシはお前を部屋に呼べぬところであつた」

好色そうに鼻の下を伸ばしているこの男こそ、現ウィスプ領主ワヤン・リイ・ギヨンカその人であつた。

ぐいと使用人の手首を引くようにして抱き寄せると、彼女は喘ぐような吐息を漏らし、その反応にギヨンカの目元もだらしなく緩む。

「レイラあ……お前が傍にいてくれぬと寂しゅうて、ワシの心の臓がきゅうというのじゃ。

どうじゃ、そろそろ今宵こそワシと床を共にせぬか。のう、たっぷりと手当てをつけてやるからの。な」

ねっとりと言い寄るギヨンカに、レイラと呼ばれた女は間近でじつと見つめ返す。

透き通るように滑らかな肌、眼鏡と長い睫毛の奥に隠れた蒼玉の瞳、上品な鼻梁にぷくりとした唇。たっぷりした蜂蜜色の髪をときほぐして香油を馴染ませれば、見事な肢体を彩るに違いない。

毎日のように女遊びをしているギヨンカには、一目見た時からこの女の価値が分かつていた。極力地味に抑えようとはしてはいるが、寝乱れる姿はさぞや鮮やかな色香を放つであろう、極上品だ。

思わずうっとり眺めていると、レイラは愛らしい唇をそっと開

いて囁いた。

「御主人様。私は使用人ではございますが、この身体までも所有物なのではございません。」

ですが約束を守ってくださりさえすれば、その時こそ、喜んでこの身を捧げます」

目を付けてこの方、幾度となく交わしあつた台詞だ。

当初は、無理矢理にでもと意気込んで口説いていたギヨンカだったが、レイラは驚くほど頑なに拒み続けた。大富豪であるギヨンカを拒んだ女はこれが初めてであったため、それが余計に彼の欲情心を焚き付けてしまい、今に至っている。

いよいよ約束の期日が迫っていた。

ギヨンカは一応その内容を思い出そうとしたが、その後のことを想像しただけで鼻息も荒く興奮してしまい、夢中で服の上から女の身体を撫でさする。が、あつと言う間にするりと抜け出されてしまった。

「ああ……ああ……ああ……約束は守る、絶対にだ。」

レイラ、だから、その時はお前も、」

喘ぐように呟く領主を前に、女は静かな笑顔を残して去っていった。

2 : アスク、チュリカとケーキ屋に行く

まさか、覚えられているとは思わなかった。

苦々しい顔で少年は足早に人混みの中を抜けていく。いや、少年というよりも『幼さを残した顔立ちの若者』という表現の方が正しいのかもしれない。

やはり今回は俺が担当すべきではなかった。適材適所に配置するのが上の仕事だろうが、と、彼は脳裏に浮かぶ憎らしい顔に悪態をついた。だがぶちぶちと文句を言ったところで自分の失態である事実は変わりが無い。仲間には報告する必要があつたが、相方のことを思い出すだけで溜め息が出て虚ろな顔になる……気が重い。しかし、些細なことでも報告は必要だ。

若者は角をいくつか曲がり、やがて古びた一件の宿に入った。カロンカロンと耳馴染みの良い音と共に、掃除をしていた人の良さそうな店主が顔を上げ「今日は早いね」と声をかける。ぶつきらばうに会釈だけ返し、彼は階段を駆け上がり、奥の扉を節付けして叩いた。

トン、トトト、トン、ト。

やがてスツと細く扉が開いたので、若者は身体をねじ込むようにして中に入り込んだ。

「何かあつたのか、アスク」

相方が、そつと扉を閉めながら訪ねる。

直前に隙間から目線をやって確認をし、窓際からも目を落とす。

毎度律儀な奴だとアスクは苦笑いする。

「んな、つけられるようなこたしてねえって、サウス」

「叩き方にも表情にも乱れがある。何かあったのだろう」

サウスと呼ばれた細身の青年はそう言うと、静かに革張りの腰掛に身を沈めながら手にしていた本を開く。

「まあ、な。たいしたことじゃねえんだけどよ、ちよいミスっちま
った」

卓上の水差しからカジュ茶をゴブレットに注ぎ、それを手にアスクもどつかと向かいの長椅子に身を沈めた。カジュ特有のすつきりした後口は気を落ち着ける効果がある。

「なあ、サウス」

「なんだ」

「その……オレ、例の女に接触しちゃった」

「……いつ」

「ついさっき」

はあ、と大きさに溜め息をつくときサウスはぱたんと本を閉じてアスクを見た。低卓を挟んだ向こうで、童顔の若者は決まり悪そうにもじもじしている。

「実はオレなんとなくさあ、ヤな予感はしてたんだ。最初に助けたあん時から。」

なあ、これってやっぱ上に報告必要なのか」

「起こしたことを洗いざらい話してみる。まずは把握してからだ」

「………ああ」

きっかけは本当に、些細なことだったのだ。

ウイスプの繁華街外れにあるドヤ街の喧騒は下町生まれのアスクにとつてはホツとする具合で、この日も彼は偵察がてらブラブラしていた。

暇さえあれば閉じこもって読書にふける相方と違い、彼は片時もジツとしていられない質だったので用が無くとも日がな一日歩き回るのを日課としている。賭事好きで話好き、おまけに喧嘩っぱやい若者でもあつた為、目立つなという上の命令を見事に背きひと月足らずで顔見知りは一両手では足りない程になっていた。

この時も、ちょうど砥ぎ屋の親仁と切れ味の良い刃物について熱く語っていたところ、

「………が違っじゃない！」

「うるせえ！いちやもんつけるんじゃないやねえこのアマ」

言い争いは珍しく無かったが女の声が混じっていたため、思わずアスクは振り返った。

日除け帽を被った若い女が、一人の調理人らしき男と店前で言い争っているのが見えた。

「ああ、ありゃ気の毒に。コスパラの店に卸しでもしたんかねえ」

のんびりと砥ぎ屋が髭をさすりながら言う。

「なんだ、ぼったくり屋か」

「まあ、そう言っちゃお終いなんだが、間違っちゃいないな。

コスパラはギョンの息がかかっているからなあ。少しでも売り上げ悪いと給金ごっそり減らされるっつう噂だ。まあ、店側も損ださないよう必死なんだろう」

苦笑いしつつ研ぎ屋は続ける。

「コスパラが相手にしてんのは宿泊まりの流しもんだよ。宿まで飲み食いするもんを届ける生業をしているんだが、何しろ儲けの事しか考えちゃいないからな。客側にふっかけるのは勿論、卸し相手でも景気悪そうだとことん足元見た値しか出さんらしいぞ。

大方、あの姉ちゃんも上手い事騙されたんだろうよ」

「ふうん」

目を細めるようにしてアスクは双方の言い争いを眺める。

まあ、気の強そうな女みたいだ、しばらくは様子見でもいいかと思いかけたその時。

ぱしん、と辺りに高い音が響いた。女が頬を押さえたままよろける。

「ごたごたうるせえ！とつとと失せる！」

顎を突き出すようにして怒鳴る男の前に、気付けばアスクは立っていた。

「おっさんさあ、ちょっとやりすぎじゃねえの」

「何だあクソガキ、横から口出しすんのか」

「おいおいおい、大した暴言吐いてくれんじゃねえか」

アスクは童顔を引き合いに出されると喧嘩を売られたと解釈する。彼の喧嘩っぱやさの大抵の原因がこれだった。

有無を言わず一氣に利き足を回し、男の腹に強烈な蹴りをお見舞いする。

ぶう、と声を漏らし男が膝をつく。その頭の毛を掴むと、むしり取る勢いでぎりぎり引き上げながら低く凄む。

「いいか。二度とオレをガキ呼ばわりすんじゃねえぞ。

もし次に言ったら、鼻の骨が粉々になると思え」

アスクの声の本気さに、男は顔を歪めたまま何度も頷く。

け、と呟きアスクは手を離れた。へたり込む男に背を向けてさっさと歩き出す。内心ではしまったと後悔していたのだが、時既に遅し。

昔から頭に血が上りやすいのが欠点と自分でも分かっているのだが、どうにも自制し難い。

相方の冷静さと混ぜて割ったら丁度いいんだがなあ、と思いつつ足を進めていると、

「ねえ、ちょっと」

くん、と腰布を引かれ慌てて振り返ると、さっきの女が立っていた。

「あ、あの。助けてくれて、ありがとう」

「あ？……ああ。いや俺は別に」

「あたし……」

言いかけて女は、ハツとしたようにアスクの顔をまじまじと見つめる。

何か付いてんのかと思いつながらアスクも女の顔をよく見、そして

「……あ」

二人同時に声を出していた。

「あなた、もしかしてあの時……」

声を震わせながら女が日除け帽を取る。

そこには彼があの時助けた、チーズ売りの娘の顔があった。

「あの、あれからずっと、ありがとうってお礼言いたかったの。あなたが助けてくれたおかげで、あたしも弟も傷ひとつなかったから」

小走りで後追いつながら懸命に少女は話しかけてくる。

黙りこくつたまま早足で先を歩きながらも、アスクは内心動揺していた。

予定外の事態だ。本来オレがこの女と接触するのは一回きりだった筈だ。しかもこの女、まだ話し足りないのかくっ付いてきていやる。

とりあえずさっさと離れるべきだろうが、かと言ってここでいきなり走り出すのも不審に思われそうだ。鍵となる者に対して不必要な対応をしてはならない。

クソッ、こんな時アイツならどうする。オレより機転が利くアイツなら……。

突然少年が振り返ったので、チュリカは慌てて止まろうとしたがそのまま身体をぶつけてしまった。

「い、いめん」

「あー、その、なんだ。甘いもん、好きか」

「えっ」

「いや、そこに。あるだろ、店」

少年が指す先には、焼き菓子の店があった。

「あ、うん。好きだけど……」

「そうか。よし、来い」

頷くと彼はさっさと店の前まで行き、扉を開けて入ってしまった。慌ててチュリカも後に続く。

菓子店の中はふんわりと甘い匂いに包まれ、棚のトレイにはたく

さんのケーキや焼き菓子が並んでいた。こわばっていたチュリカの顔が、思わずほころぶ。一般の女子の類に漏れず彼女も甘く美しい菓子が好きだったが、今では滅多に口にするでもでずにいる。

「選べよ」

ぼそつと言われた言葉にチュリカが目を丸くしている、と

「好きなんだろ、そんなんが」

居心地悪そうにしつつも、少年はぎこちなく笑みを浮かべた。いや、無理に口角を上げているといった方が正しいか。

「あの、でも、どうして」

「あー、ほら……オレ、そう、オレが食べたかったんだよ」

「あ、じゃあお礼にあたしが」

「いって！お前、金無えんだろ」

思わず放ってしまった一言にアスクはハッとしたが、その時は既に少女は扉を開けて出ていこうとしていた。

「ちよつ、待てっ」

慌てて彼女の手を掴んだが、振り返った彼女の顔はお世辞にも上機嫌とはいえなかった。

「二度も助けてくれてありがとう。」

でもあたしを哀れんでくれているのなら結構よ」

「違っ………」

今思えば、ある意味このまま別れていけばよかったのだ。だがこの時アスクはどうしてだか少女の手を離せずにいた。

「いいから！勝手に帰ろうとすんじゃないよ。あゝ、その、オレ昔っから口悪いんだ、だからよ」

ぐいぐいと手を引いて柵の前まで連れ戻し、向き合うように肩を掴んで強く言う。

「オレが！お前と！一緒に食べたかっただけなんだよ！

男一人じゃこんな店入り辛えだろうが！」

聞いていた少女の頬が、一拍置いてほんのり桃色に染まる。

それを見て、きよんとしていたアスクだったが、

「うふふ、おアツイわねえ」

と言う店員の言葉を聞いて、ぶわっとなつ赤になった。

違っ、オレはそんなつもりじゃ………！言葉に出そうと口をぱくぱくさせていると、

「………」

うつむいたまま、チュリカがケーキの一つを指したので、思い直してくれたかとホッと、アスクも自分の分を頼んだ。

店員はにこにこしながら奥の喫茶部屋へ通してくれ、冷たいババ

茶を出してくれた。

しばらくはカチャカチャとフォークと皿がぶつかりあう音だけが辺りに響く。

「チーズケーキ、好きなの？」

「あ、いや、これあんま甘くなさそーだし……っ」と

しまったと思ったが、チュリカはあまり気に止めなかったらしく

「あたしんちもね、チーズ作ってるからそれにしなきゃなとか思ってたんだけど。」

でも、今日は久しぶりだから一番食べたいものにしちゃった」

と嬉しそうに、飴がけオレンジが乗ったチョコレートケーキをついている。一すくいして口に運ぶたび、チュリカの目尻と口元が緩むのが見えていて微笑ましい。

「オレのも食うか」

「えっ、でも」

「オレ、そんないらねえんだ。もう充分だからさ」

「じゃあ……お言葉に甘えて」

アスクは甘いものの味も匂いも苦手だったが、この程度のことです少女に幸せな顔をさせてやれたことが嬉しかった。

きつつい顔した女がにこしてんのはいいもんだなと、のんびり渋いババ茶を啜っていたのだが。

「ねえ、よかつたらあなたの名前を教えて」

というチュリカの問いかけに、我に返った。あれ、オレ、食べさせてる間に消える筈じゃなかったか。

「あの……えっと、その」

アスクがあたふたとしているのを勘違いしたのか、

「あ、ごめんね自分から名乗りもしないで。」

あたしはチユリカっていうの。古語で緋色って意味よ」

知ってる、とはもちろん言えず。

「お、オレは、アスク」

アスクは略名をそのまま教えてしまったのだった。

3 : アスク達、作戦会議をする

サウスは渋面のまま片手で額を抑えた。

「相変わらずの不器用さだ……いくらでも誤魔化しようがあっただろうに」

「なあサウス、これって」

「要報告。接触しすぎたのはもちろん、名まで教えたのはまずかった」

「げ………やっぱり」

溜め息をついてアスクはごろんと長椅子に横たわった。そうしている間にもサウスはクローゼットから薄手マントと帽子を出して手際良く身に着けると、

「お前はじっとしてろ」

と言い残して部屋から出て行ってしまった。

「アイツにも報告かよ………」

ふくれっ面でアスクは呟く。

彼は上司のことが苦手だった。嫌っているというわけではないのだが、妙に対抗意識を燃やしてしまうのだ。だがそう思っているのはアスクだけで相手はむしろ自分を歯牙にもかけていないのは明白

で、それがまた腹立たしいのだった。

うだうだと椅子の上に寝転がっているうちに、どうやらいつの間にかまどろんでしまったらしい。

突如、額を指ではじかれて、アスクはハッと目を開けた。

自分を見下ろす顔が三つ。

ぎよっとして跳ね起きると、

「やれやれ。キミは本当に図太いな」

副長が苦笑しながらもう一度アスクの額をはじいた。隣するサウスはやっぱり渋面で、少し離れた所にいる隊長は何とも言い難い表情でこちらを見ていた。

「す、すみませんオレっ」

おたおたしながらアスクが立ち上がりかけると、隊長は「拭え」と呟いた。

「よだれが出ているよ」

面白がるように副長が言い、慌ててアスクは袖で拭う。恥ずかしさで顔が熱い。ちくしょう、失態ばっかじゃねえか。

「サウスから話は聞いた。軌道修正だ」

隊長が言い、書記代わりの副長が低卓に計画用紙を数枚広げた。

計画建て直しの議論が続き、やがて最終確認が終わる頃にはすっかり夜更けになっていた。

「最後に確認しておきたいんだが」

ひとしきり確認を終え、サウスが買出してきた夜食を皆で食べていると、隊長がアスクに言った。

「お前、これで本当にいいのか」

「もちろんです」

「彼女を傷つけることになるぞ」

「まあ、仕事スから」

あぶつた塩漬け肉の塊を引きちぎってバナバ菜に挟みながらアスクが答えると、

「あのね、いまいち分かってないみたいだけどさ。

キミがそのチュリカちゃんって子を好きなんじゃないかって、隊長は気遣ってくれてるんだよ」

ガリガリとサラダにナッツを挽き回しかけながら、副長がからかうように言った。

「なっ………!!」

瞠目してアスクはバナバ菜包みを口の端から出したまま、隊長をぐわつと振り向く。苦笑いしつつも黙っているその姿に

「あに、いっへうんふは！ふおんあほほ、はんはえはほほはいっふ

はら！」

「ちゃんと食べてから言え」

サウスがアスクの膝を叩く。できる限り急いで咀嚼し、ごくりと飲み込むとアスクは隊長にくっついてかかった。

「何でちよつとばかし話したくらいでそんなこと言われなきゃならんのですか！」

ガキじゃあるまいし、俺これでも女には不自由してねえし！

それを言うなら大体隊長のほうこそ」

「アスク」

サウスの自制を促す厳しい声に、無然としたままアスクは黙り込む。

上司に対する発言じゃないのは分かっているが、隊長の今の立場や心境を知っているだけに、自分を心配されるのが嫌だった。

これじゃあオレが半人前って言われてるのと一緒じゃねえか。隊長の方が今回の仕事はずっとキツツイ内容で、一方のオレなんか相変わらずのしょぼい端役。なのに、なんでオレみたいなのを氣遣うんだよ。

似ている、と言われた日のことを思い出す。追い越せ、と言われたことも。あれから月日が経ち、それでも追い付くどころか、どんどん引き離されてく一方で。

グツと拳を握りしめ、アスクは隊長に向き直った。

「隊長、オレ、本当に大丈夫スから。」

オレが成すべきこと、ちゃんとやってやります」

隊長は口にして応える代わりに、ただその大きな手でアスクの癖毛をくしゃりと撫でてくれた。

1 : チュリカとジェイス、バザールに行く

ジェイスが来てから、随分と我が家の雰囲気が変わった気がする。

荷車の後方端からキュウと二人で足をぶらぶらさせながら、あたしはしみじみと思った。

週末の大規模なバザールの日は内職物もまとめて出すので、あたち達もジェイスの売りに付いていくことにしている。馬に引き車を付けてのんびり進むのは、今までの徒歩移動と比れば本当に楽ちんだ。

「お前ら腰が痛くなつたらんか。

休みたかつたらいつでも言うんだぞお」

御者台で前を向いたまま、のんびりとジェイスが言う。

「大丈夫、快適よね」

にこにこ顔でキュウも頷く。時折激しく揺られていても、重荷を抱えた延々の徒歩移動を思えば有難いことこの上ない。

もじもじと指をいじりながら、思い切ったようにキュウが口を開いた。

「チュリカあ」

「ん？」

「お、おれも、大きくなつたらジェイスみたいに馬に乗るんだ」

「そっか」

うん、と大きくかぶりを振ってキュウは嬉しそうにしている。いつの間におれって言うようになったらう、とあたしは振り返って、影響を与えたであろう御者台の男を見た。

ジェイスはとにかく人に好かれる。付き合いがいいからか、見知らぬ相手にもあつという間に打ち解けさせるのが得意だ。

彼がチーズを売るようになってからというものはほとんど売れ残りが無い日が続くため、今ではほぼ毎日売り子は彼に任せるようになっていた。その間、あたしやキュウは家に残ってチーズ作りや内職に没頭ができる。

おかげでその日暮らしも危うかった生活の悩みが随分と緩和されたように思う。僅かずつではあるが、蓄えもできるようになってきた。

心に余裕があれば人に優しくできるということを、あたしは最近ようやく思い出せるようになっていた。

いつもの炙るような夏の日差しと違い、今日は随分と優しい風が頬を撫でる。そのせいか、話しかけるあたしの声も自然とはずんだ。

「ねえねえジェイス。今日は早く売り上げさせて、後でみんなで買い物でもしようかななんて思ってるんだけど、どうかしら」

「ん〜、オレは別に構わんよ。今日は引き車で来たしなあ、麦粉やら根菜やら重いもんは何でも買え買え」

「あ、違うの。あたしが言ってるのは、その……ちょっと嗜好品っていうか、ジェイスが欲しいものあったら買っついていこうかな、って」

「おおっ」

驚いたように手綱を持ったままジェイスが首だけ振り返る。

「どうしたチユリカ、お前がそんなこと言うなんて熱でもあるんじゃないのか」

「しっつれいな！」

あたしは御者台まで這っていき、手にしていた編みかけのリースでぼさぼさの金髪をばしっと叩いた。

「いってえ、とばやくジェイスの気持ちも、実はまあ分からなくもない。」

彼は借金返済の為さんざん働くばかりで、自分の物は何ひとつ買わずにいたのだ。もっとも、それはあたしやキュウも一緒に、二人きりになってこのかた生活必需品以外を買うことはなかった。

「あ、でも買うっていつてもちよこつとよ、ちよこつとだけだからね！」

「はっはっは。でもまあ、別に俺はこれと欲しいもんは無いからなあ。」

「まだ借金もたんまり残っていることだし、気持ちだけ受け取っておくぞ」

「………だつて、ジェイス。
煙草切らしちゃってるんでしょ」

「ん？ああ。まあそうだが」

ジェイスが愛用している香煙草はこの辺りでは手に入りにくい。

一般の煙草に比べて細長く、名の通り柔らかな香に似た煙がたつ。

愛煙していると身体からほんのり同じ匂いがするようになるので、香煙草の嗜好者はすぐそれと分かる。喫煙を楽しむというよりは香りを身にまとう目的で利用され、その個性さ故大都市以外では手に入りにくく、多少値も張る代物なのだ。

「今日でジェイスがうちに来てひと月になるわ。」

「どうなることかと思っていたけど、おかげで何とかやっていけるし。」

まあ、そういくつも買えやしないけど、2、3箱なら大丈夫」

「チュリカ……」

「そーのー代ーわーりっ！」

その分またしっかり働いてもらっから！」

慌てて言い繕うあたしを見つめ、ジェイスはとても優しい顔で笑った。

ごくたまに見せるその笑顔は、ぼさぼさ頭のおっさんなのにも関わらず、妙にあたしをどきまぎさせる。

手綱を取る無精髭だらけの横顔はのんびりとはしているが、よく見れば端正な造りだ。ジェイスが店番をするようになって、女性客が増えたのは気のせいじゃないのだろう。

天性のものなのか定かではないが、彼に人柄だけではない不思議な魅力があるのは確かだった。

危ない危ない、おっさんに油断するなかれ。

あたしは自分にそう言い聞かせながら、再びキュウの横に移動した。

週末のバザールは、あまりの人出と店舗数による混雑が酷いため、出店場所に関しては数日前からの登録申請が必要だ。

平日ならば、早朝より早く開く広場中央の管理塔にてその場で出店申請をすればよい。ただし、早く行ったからといって必ずしも希望場所が取れるわけでもない。いわば管理側の匙加減ひとつでどうにも変更できるのだ。今までコネも無く外聞も良くなかったあたしは、大抵ひとけ人気の少ない隅の方へ追いやられる形で店を出していた。

ジェイスが売り子担当をしてくれるようになって気付いたのが、出店場所の良さだ。彼の人好きのする人柄の成せる業なのか、最近いつも中央付近のなかなか良い場所が取れているようだ。毎回商品をほとんど売りさばけているのには、このことも関係しているのだろう。

「着いたのが遅くなっちまったからなあ。気合い入れて売らんと」

さほど焦っていない様子でジェイスは管理塔に入ろうとしたが、あたし達が付いてこないのをみて怪訝な顔をした。

「どうしたチュリカ、ぼさっとして。早く行こうや」

「あたし、ここで待ってる。どうせ予約の確認だけでしょ」

「まあ、そうだが……」

ふむ、と思案すること数秒、いきなりジェイスはキュウを抱きあげるとひよいと肩車した。わあっと大喜びするキュウを肩に乗せたまま、今度はジェイスはあたしの手を掴んできた。

「えっ、えっ」

「あのなあ、何を遠慮してんのかは知らんが、俺みたいなのが行くよりも若い姉ちゃんを相手した方が、管理員らも嬉しいに決まってるだろうが」

ほれいくぞ、と、ジェイスはあたしの返事を待ったりせず、手を繋いで歩き出した。強引なようできてそうではないのが、すっぽりと包まれた手の暖かさとゆるさでわかる。思わずそのまま大人しく付いていつていると、ジェイスは振り返りながら

「はっはっは、チュリカもそうやって黙ってさえいりゃあ、普通に可愛いんだがなあ」

と、悪びれもせず言った。

「黙ってたなら、は余計よ!」

言い返さないと顔が赤くなりそうだった。

つい先程どきまぎしたことを思い出す。先週末の出来事といい、妙に心がざわつくのは何故だろう。深く考えない方がいい気がして、あたしはつとめて冷静さを装ったまま黙って管理塔に入っていた。

店舗担当にはいつも大抵決まった管理員達がついているのだが、あたし達の前に現れた担当は最近配属になったらしく、初めて見る顔だった。ジェイスの顔を見て「ああ、こんにちは」と言いかけて、彼はあたし達が手を繋いでいることに気付きわずかに眉をひそめた。

「こいつらは俺の甥っ子と姪っ子なんだ。

お前さんは入ったばっかで知らんだろうが、こうちっこく見えても姪っ子はなあ、随分長いこと出店している常連なんだぜ」

得意そうに話すジェイスに、この人が突っ込みたい所はそこじゃないと言いたいのをグツとこらえ、あたしは即座に手を離れた。ついジェイスのペースに乗せられそうになったが、年頃の女が男と手を繋いで役場に入るのはやはり適切行為ではない。

ジェイスはいまいち理由が分からなかったのか怪訝そうな顔であたしを見たが、すぐに店舗位置や時間等について職員と話し始めた。やがて確認も終わり、

「帰るぞ、ほい」

と、ジェイスは再び手を差し出してきたが、今度こそあたしがその手を取ることにはなかった。

塔を出る際にちらりと後ろを振り返ると、順番に待つ出店者達の頭の間から先程の職員がじっとこちらを見つめている気がした。

2 : アスク、チュリカを誘う

ジェイスが予約してくれた場所は、なかなか良い条件だった。

周りが野菜や果物を売る店、パンを売る店、陶器を売る店、と落ち着いた店舗ばかりなのも嬉しい。支柱に布をかけただけの店舗の集合体の中では、いかに埃が立たたず匂いが移らない環境かも商売の大事な条件となるのだ。

「直接強い光が当たる場所でもないから、チーズも傷み難そうね。よかった」

あたし達は管理庫から借りてきた木箱をひな壇になるように並べて布で覆い、数種のチーズを飾っていった。

味見ができるよう、週末のかき入れ時のみ並べるクラッカーも皿に盛り付け、ついでにジユウムのジャムの瓶の蓋も一つ開けて傍に置いておく。酸味のあるジユウムジャムはさっぱりしたタイプのチーズとクラッカーに合わせると美味なのだ。本来ならば店に高く卸すつもりだったのだが、先週末訪れた店で悪質な詐欺にあいそうになつてからというもの、しばらくは出店で安く売ろうとあたしは思っていた。

後でジェイスに店番を頼み、大通りの薬師店までココバの種の買取交渉に行こう。ヤモツプの店とベイルーサ、どちらが高く買い取ってくれるだろうか。

しゃがみ込み、色紐付きのリースを目に留まりやすいよう一番前に並べていたあたしの頭上を誰かの影が重なったのが分かった。

「いらつしゃいま……」

客と思って顔を上げたあたしを見下ろしていたのは、逆光で顔こ

そよく分からなかったが、あの日アスクと名乗った若者の姿だった。癖のある赤毛を日に透かし、両拳を下衣ポケットに押し込んだ状態では立っていた。

「アスク！」

驚いてあたしが立ち上がると、図らずも間近で向かい合う形となつてしまったため、思わず互いに後ずさつてしまった。

「チーズを売ってるって聞いたからさ………一つ買ってもいいか」

気まずそうに言いながら店の奥へと踏み込みかけ、アスクは奥の人影に気付いたようだった。

「いらっしやい！兄ちゃん、チュリカの知り合いかい」

ジェイスは呑気に声をかけ、キュウはジェイスの袖後ろにそつと隠れる。

「………まあ。そんなところだ」

「おお、そいつぁサービスせんといかな」

そう言うと、ジェイスは穴開きナイフで数種のチーズの切れ端を削っていき、木皿に敷いたクラッカーの上にぽんぽんと乗せていった。

「さーあ、食べ食べ」

半ば強引に差し出されたその皿を受け取り、アスクはジェイスをちらと見た。そしてカナツペのうち一切れを持ち上げ、吟味するように匂いを嗅いだ。

「不思議な香りでしょ、それ香草が入ってるの。クセあるけどワインに合うわよ」

あたしが説明するのを黙って聞きながら、アスクはカナツペを口に入れる。

「どっつ?」

緊張しつつそつと訊ねると、

「………うまい」

ごくりと飲み込んでからそう答えてくれたので、あたしはホツとした。

「よかったあ。香草入りはいくつかあるんだけど、それは新製品なの。」

ジェイスが考えてくれたんだけど………あ、ジェイスっていうのはこの人。今うちで働いてくれるんだけど」

どおーも、と会釈するジェイスに対し、アスクは黙ったままだ。

あれ、こんなに静かな人だっけ。

あたしが不思議に思っていると、

「ちょっと時間、取れるか」

アスクはあたしの方を向いてそう言った。答えに窮していると

「店番はまかしとき、俺とキュウでばっちりやるさ。な、キュウ」

とジェイスが言ってくれたので、申し出を受けることにした。

「じゃあ、ちょっとだけ空けるわ。二人ともごめんね」

あたしはアスクと共に店を出た。にこにこ手を振るジェイスと顔だけ出したキュウがあたし達を見送ってくれた。

「それにしても、よくあたしの店を見つけられたわね。驚いちゃった」

人混みの中をどんどん進むアスクを追いかけるようにして話しかける。

「まあ、この辺りはよく歩いてるしな。散歩の途中で偶然見つけた」
相変わらずぶっきらぼうな感じでアスクは答えた。そしてそのまま前を向いたままでどんどん先を急ぐ。そのあまりの速さに、終いにはあたしは小走りになってしまった。

「ね、ねえ、ちょっと、待って、早すぎるっば」

かける声が思わず尖ってしまったため、それでようやくアスクは気付いたように振り返った。

「あ、あー……………悪い」

「あんまりお店離れ過ぎると、戻るのにも時間かかっちゃうでしょ。ちよつと話すくらいならその辺でいいわ」

あたしはきよるきよると辺りを見回し、手ごろなベンチを見つけてそこへ誘った。

「や、そんなトコじゃなく、どっか店にでも入った方が」

「別にいいわ、そんなに長い間お店放つたらかしのできないし。ここで充分」

「そうか」

あたしが先にベンチに座ると、アスクは「待ってる」と言い残しどこかへと走っていった。

しばらくして戻ってきた彼の両手にはゴブレットがあった。黙って差し出された片方のそれをあたしは受け取り、口をつけた。氷片混じりのさっぱりとした果汁が、埃で痛んだ喉を潤してくれる。

「おいしい」

あたしの眩きに、アスクはホツとしたように微笑んだ。今日初めて見せる緩い表情だ。

「今日はわざわざありがとう。嬉しかった」

素直な気持ちの口に出すと、

「あ、いや、別にいい。たまたま暇だったからさ。ほんと、たまたま」

と、言い訳でもするかのようにアスクが答えたので、あたしの口元も緩んでしまった。ぶっきらぼうだけど気のいい人だ。

「あのさ。先にひとつ、聞いておいてもいいか」

突如改まった口調でアスクが訊ねてきた。

「何？」

「あいつ。あの、一緒にいた男」

「へ、ジェイスのこと？」

「ああ。その……何なわけ？」

「何って、さっき言ったでしょ。今うちで働いてる人って」

「いや、そーいうことじゃなくて、さ」

もごもごと口籠り続ける相手に、あたしは少々じれったくなってきた。

「ごめん、わざわざ誘ってくれたけどそうのんびりもしてられないの。いつもジェイスにお店任せちゃってるから、週末くらいあたしが仕切らないといけないし」

「そんなら聞くけどよー！」

突如アスクが声を荒げた出ので、あたしは驚き、

「お前、あの男の事どう思ってたんの？好きなのか？」

という言葉に、文字通り、絶句してしまった。

3 : チュリカ、過呼吸をおこす

あたしが口をきけないでいるのをアスクは誤解したらしい。

「そっか………。まあ、甲斐性ありそうだしな。お似合いだよ」

姿勢良く座り直すと彼は一気にゴブレットを傾け、げっぷをした。何だかおかしな話になってきた気がして、あたしは慌てて訂正した。

「違うの！あの人はずただの居候よ。借金の形代わりにあたしのところで働いているだけなの」

そう言っても尚、アスクがあたしに向ける視線には疑わしさが残ったままだ。

「だってあいつ、男のオレから見ても結構いい男だったぜ。」

ずっと一緒にいるんだろ、惚れちまっても不思議じゃ」

「やめて！」

アスクの語尾に被せるようにしてあたしは叫んだ。

わざわざ呼び出しておきながら、この人は何故こんなことを言うてくるのだろうか。

何故みんなそういう目で見たがるのだろうか。さっきの管理塔での視線がよみがえる。

「あたしは誰かを好きになったりなんて、そんな馬鹿げたことにつつを抜かしたりしないわ。勝手に決めつけないで」

「ハア？ちょっと待てよ。好きになんのが馬鹿げてるって考え方、おかしいだろ。なんでそんな結論になんだよ。」

大体お前女だろ。女ならフツー、甲斐性ある男捕まえようとするもんじゃねえのかよ。それこそ恋だの愛だのいっつも考えてるもんだろうが」

いかにも知った風な言い方をするアスクに、あたしは声を抑えて言った。

「恋だの愛だの、そんな夢物語、あたしには関係ない。」

独りでいることって、そんなにいけないことなの？あたしはただ、誰にも頼らずにひっそりと生きていきたいだけ」

「気持ちは分からねえこともねえけどよ、誰にも頼らないってのは無理だろ。結局誰かに何かしら関わってっから、俺達生きていけないだ。」

「いいじゃんか、恋愛したって別に。男に頼って何が悪いんだ、女は守ってもらってもんだろ」

アスクの身体があたしに近づき、怒ったようなその顔は前を向いたまま、そつとあたしの肩を後ろから囲むように触れてきた。肩を抱こうとしているのだと気付き、あたしはうるたえながら手を払おうかと迷ったが、それ以上アスクが手を伸ばしてくることはなかった。

「あいな」

前を向いたまま、ぶっきらぼうにアスクが語り始めた。

「オレもさ、ずっと一人だったんだ。」

おふくろは俺を産んで死にまじったらしいし、それでオレが憎く
なったおやじに労働教院にぶち込まれたらしくてさ。

物心ついた時から、オレの周りには楽しいもんなてひとつもな
かった。生きるってこたあ、ごりごり働いて不味い飯食って、そん
でクソして寝るってだけのもんだってずっと思ってたんだ。

んで、教院出てからはろくな働き口もねえもんだから、オレも腐
ったような生き方しててさ。

そんな時だったんだ。オレが一人の男に出会ったのは「

身体を硬くしたままちらりと見やると、アスクは遠くを見るよう
な目をしていた。

「一緒に行こう、ってそいつはオレを誘ったんだ。」

お前は俺を補ってくれ、俺はお前を補うから、って。

オレがどんだけ頑張っても追い付けねえようなスゲエ奴なのにさ。
そいつ、お前のおかげだって、いつも言うんだ。

俺のできないことをやってくれる、支えてくれる、お前がいてく
れて良かったって、んな痒くなるような台詞がポンポンと飛んでく
るわけ。

初めのうちは気色悪くつてよ。けど、だんだんとそれに慣れてく
るとさ、なんかちよつとは悪い気しねえもんなのな。

初めてさ、オレ、人から頼られたんだ」

アスクは溜め息をついた。

「そうやって今までできたからさ、なんか分かる気がすんだ。」

男の俺ですら『一人で生きる』ってのはしんどかったから、女の
それがどんだけかってことくらいは。

それと、気い張って強く見せてなきややってけねえってことも「

そこで口籠ると、アスクはしばらく黙っていた。
やがて、意を決したかのように彼はあたしの方を向くと、控えめに触れていた手で今度はしっかりとあたしの肩を抱くと、ぐっと顔を傍に寄せてささやいた。

「チユリカ。

お前を見てると、以前のオレみたいで放っておけないんだ。
オレが、お前のことを支えてやりたい。
オレのこと、見ていて欲しい」

頭の中が真っ白になった。

顔が熱い、鼓動が早すぎて苦しい。息ってどうやってするものだ
っけ。

いくらこういう分野に疎いあたしでも、これが告白というものらしきことは分かった。

けれどまさか、こうして知り合って間もない相手からいきなり受けるなんて思ってもみなかった。

一体あたしはどうしたらいいの。
そもそもあたしはアスクのこと、どう思っているの。

「あああ、あたしい」

あたふたしたあまり、声を裏返らしてしまったのでアスクは苦笑
いした。

「ああ、いや、いいんだ。返事は急がねえ。

何度か会ってオレを知ってもらって、それから考えてくれたらいいさ」

そんなこと言ってる割には何か近いんですけど！
アスクの手がそつとあたしのおさげに伸びる。撫でてくれるつもりだろうか。あたしはそれを受け入れるべきか迷った。
支えてやりたい、って言われた。
でも、あたしが彼を頼つてもいいのだろうか。
あの日誓った事を、忘れていいのだろうか。

誰か！誰か、お願いします！

父さんを助けて！助けてよオオオオツ！！

突如、三年前の光景が頭をよぎった。

声が潰れるまで叫んでは走り、ドアを血塗れの拳で叩きつけながら懇願した。

恐ろしい光景を前に、声にならない悲鳴を上げ続けた。

絶対に忘れない、許さないと、誓ったあの日。

「……………戻らなきゃ」

突如立ち上がってよろよろと歩き出したあたしに、

「お、おい」

取り残された手を気まずそうにしながらも「送ってくよ」とアス

クは追いかけてきた。

「付いて来ないで」

冷たい言い方だと分かってはいたが、今のあたしにはそれを言うのが精一杯だった。

寒い。

夏だというのに、震えが止まらない。

ふらふらと歩き続けるあたしの後を、アスクはもう追ってはこなかった。

バザールに戻ると、店では既に検分中の客が数人いて、ジェイスが相手をしているところだった。

彼は実に楽しげだった。身振り手ぶりでやり取りを交わし、通りすがりの人々にも惜しみなくチーズやジャムの試食をさせている。が、決して売りを強要しているというわけでもなさそうだった。

買い物を終えた客には破顔してお礼を言い、さも嬉しそうにぶんぶん手を振りながらその後姿をずっと見送っている。客もつられてにこにこしながら手を振り返す。

店からは確実にチーズの数が減っていた。

「おうつ。チュリカ、おつかえりい」

遠目からしばらく眺めた後で店に戻ってきたあたしに、陽気にジエイスが声をかけてきた。返事をする気も起きずあたしは黙って店に入り、ひな壇裏の敷布の上に膝を抱えて座り込んだ。

なんだか、さつきからずっと息苦しかった。

アスクとのやり取り。あの日の光景。ジエイスの商い。

．．．．．はあ．．．はあ．．．はあっ．．．．．

胸を押さえているうちに、少しずつ息が荒くなってくる。

口で呼吸を繰り返すために唇はかさかさ乾き、喉からはひゅっひゅっ音が漏れる。

．．．．．はあっ、はあっ、はあっ、はあっ、はあっ．．．．．

始めよりもあきらかに呼吸が速くなり、自分で制御できなくなってきた。ぐらぐらと世界が暗転しかける。

いやだ、どうして今頃になってまた。

痛む胸を庇いながら横になろうとしたが、手足がじんじんと痺れて思うように動かない。

．．．．．はっ、はっ、はっ、はっ、はっ．．．．．

．．．．．はっはっはっはっはっはっはっ．．．．．

苦しい、怖い、もしかして死んじゃうの？

いやっ．．．．．たすけて！

バスッと大きな音と共に、突如視界が真っ暗になった。

「ごしゃごしゃしたものが頬に当たる感覚で頭に何か被されたのだと分かる。」

何、何なの!?

恐怖でパニックになりつつ、うーうーと声を出してもがきながらそれを剥ぎ取るうとすると、

「動くんじゃない」

「ごしゃごしゃを隔てた向こうから声が聞こえ、突如あたしは両手ごと誰かに抱き締められた。」

「大丈夫、発作を治める方法だ。お前が被っているのは紙袋だ。何も考えるな。楽にしる」

.....はっはっはっはっはっ、はっ、はっ、はっ、はっ、はっ.....

「いい子だ。そのままじつとしてる。じきに楽になる」

.....はあっ、はあっ、はあっ、はあっ.....

「.....キュウ。すまんが少しの間店番しててくれ」

ああ、紙袋越しからでもかすかに届く香煙草の香り。

幼子をあやすかのように優しくとんとんと背中を叩きながら

「大丈夫。大丈夫」

と歌うように言葉をかける低いその声。

あたしは目を閉じた。泣くまいと必死だった。

どのくらいそうしていただろうか。気付けばもう随分と呼吸が楽になっていた。胸の痛みも消えかけている。

「……………落ち着いたか」

問いかけに、あたしはこくと頷いた。

視界が開け、覆われていたものが無くなったことで、あたしは突き刺さるその日差しに顔をしかめた。

見上げると日差しで透けたぼさぼさの金髪が見えて、なんだか金のたてがみみたいだ、とあたしは思った。

ぼさぼさ頭は、優しく笑っていた。

3 : チュリカ、過呼吸をおこす（後書き）

補足

労働教院

いわゆる孤児院のようなものだが、目的は孤児を保護するためではなく、底辺の仕事に就かせるための施設。

孤児達の労働賃金によって施設は運営されており、悪評は絶えない。過酷であったり危険であったりする労働に就き、そのまま命を落とす子どもも少なくない。

最長13歳まで保護という名目で子ども達は縛り付けられているが、施設を出ても身元不明に加え、教院出身という偏見により、ほとんどの者はまっとうな職に就けないのが現状である。

1 : 王、ダ・ラ・ヤーンに会いたがる

「……今日も欠席だったな」

誰かに問うというよりも己に言い聞かせるようにして、王は呟いた。

「『ダ・ラ・ヤーン』のことですか」

書類をトントンと机上で端合わせしながらウイス・ガイストが答えた。

ダーナン国の首都ローエンの街並みを見下ろすようにして高台にそびえ立つ王宮ルルドラ。広大な敷地内には名物12の塔が王宮を取り囲むようにして散らばっている。それぞれの塔に趣の異なる装飾が施してあり、各担当補佐官達が己の担当塔をめいめい好きなように活用（ただし国土貢献するための研究塔という名目範囲内）できるといふ特権があった。

ちょうど、宮廷内会議室の一つにて総官定期報告会が一段落したところだった。10人の補佐官のうちほとんどは退出し、男女官各総括を務める『ウイス（1）』と『メア（7）』である補佐官達二人、そして王が残るばかりとなっていた。

「あの方は国を飛び回るのが仕事ですから。まあ、出席ばかりされているようではこちらが困るというもの」

生真面目なガイストは、言葉の端に含まれるものを汲み取ることはしない。

彼には礼節と伝統を重んじるという東の国リュウシンの血が混じっている。祖父の代よりダーナンに政治での客技人として呼ばれ、

以来、親子孫三代共に代々の国王を補佐しているのだ。

政治・経済・文化各分野の優れた技術を持つ者を、客技人という名を使い法外額で他国から買収するのはダーナンのお家芸だ。「淀み川の橋腐り」という言葉にあるように、頑なに閉鎖姿勢を取るばかりでなく他国のものでも旨味アリと踏めば少しずつ新風を取り入れるのが、ある種この国を長寿国と言わしめている理由の一つなのかもしれない。

ガイストは中年の域も後半へとさしかかっていたが、冠付きの複雑なりユウシンの衣装をいつも身に纏い、生真面目な面持ちに無駄の少ない動きで仕事をテキパキとこなすその機敏さは若かりし頃より衰えることはなかった。

「そもそも」

僅かな苦渋を含ませガイストは続ける。

「まがりなりにもダ・ラ・ヤーンは王の影という形によって存在しておるのです。

王が影を気にしてはなりません。影こそが常に王を追うことで成り立つ故」

「もう。野暮なことしか言えないのねえ、ガイストったら」

ジヨウコウカの香が放つ高貴な香り。緻密な透かし彫りが入ったその扇をひらひらとはためかせながら傍にいた貴婦人が口を挟む。

ウイスであるガイストとペアを組んで国を動かす12人の補佐官の一人、メア・レティアその人である。

豪奢ながら流行も忘れないドレス、十数年来衰えない落ち着いた美貌、崩すことなきその微笑みに、宮廷内でも男女問わずファンは多い。彼女は若くして夫に先立たれて以来、恋人は作っても再婚は

することなくガイストと共にペアを組んで政治を行っている。

一見相反する二人のようにも見えるが、おおよそ言い争いというものが二者間で行われたことはなかった。

「そのような言い草は心外だが。私は王の言葉に答えただけだ」

「ふふ。まあ、その真面目さが貴方のイイトコなんだけど。

よく考えて御覧なさいな。陛下がどれだけヤーンに会っていないのかを」

「………つい最近会ったばかりの筈」

「あらあら、これだから男はダメねえ。

もうざつとひと月半よ、ヤーンが陛下の拝顔を賜って以来。

そりゃあもちろん、寂しいに決まっているじゃないの。ね、シノワ様」

さらりと振られて思わず王は頷いた。そしてそんな自分に、若干13歳の若き王はほんのりと顔を赤らめてしまう。

ロウ・シノワール・グルゼアスタ・ティ・グ・ダーナンは、29代目国王である。

3年前に前王が突如崩御して以来、補佐を強化させる形で自身も国政に関わってきた。まだまだ成人前ながらその忍耐強さと努力ぶりには、周りの補佐官達も内心感心している。荒療治的に行政参加をさせているゆえに、実質的な能力開花とまではまだ到底いかないのだが。

彼はその13歳という若さからくる、中性的な美しさを持っていた。その為城下町で出回る肖像画は、先王時に比べ数倍の売り上げを保っているという。いつかご拝顔賜りたい、それが噂を聞くダーナンの若い娘達の憧れでもあった。

「……………いつ、戻ってこられるのか」

ためらいがちに王はレティアに訊ねた。本来特定臣下に思い入れをすることはあまり良きこととは言えなかった。ましてや、まがりなりにも一国の王が一人の異性に肩入れしているなどと噂が立つものなら、それは重大な意味を持つこととなる。

しかし今この場に居残るガイストとレティアだけには、シノワはシノワ個人としての気持ちを口にすることができた。彼らはシノワが幼き頃よりずっと守ってきてくれた、数少ない心許せる友でもあった。

「そうですね。どちらかと言えば戻ってくるのを待つ、というよりも」

ここで、いたずらっこのように扇を口元に当ててレティアは一旦言葉を切った。じっと待っていたシノワだったが一向にレティアが後を続けるそぶりを見せないで、これは自分への問いかけなのだと判り、鼻梁に微かな皺を寄せて考え始めた。

待つのではない、ということであれば、動けということなのか。逡巡した後、シノワは素早く書類をめくり訪問行事予定表を探し当てた。数多く地訪問予定の地へざっと目を走らせた後、一つの地名を見つけて王は嬉しげに微笑んだ。

「そうか。ここか」

9月下旬の収穫祭。ワインに使用する葡萄の収穫期の祭りだ。ダンナン国内でも有数のワイン蔵があるウィスプでの祭りに、今年も例年通り王は参加することとなっていた。

「確か、今ヤーンはここにいるのだったな」

「さすが、シノワ様は聡明であられますわね」

レティアは魅惑的なウインクをして見せた。しかし王はせつかくの美女のそれには気付かぬまま、嬉しそうに微笑んでその地の名を指でなぞった。

「会えるんだ、ウィスプで。どんな格好していこう」

「お待ち下さい陛下」

驚いたようにガイストが止める。

「よもや陛下御自らダ・ラ・ヤーンの元へ向かわれるおつもりですか。

そのような危険なお考えは何とぞお止め下され。どうしても会う御意向とあらば、このガイストを始め供八名も同伴いたします故」

「野暮過ぎ、ガイスト」

呆れ顔でレティアが突っ込む。しかしガイストは必死だ。

「何を言うのだ、あの方と陛下を二人きりで会わせられるものか。それこそ獅子と子猫のようなものではないか」

「この場合の獅子は私か」

のんびりと王が茶化したので、ガイストは冠の両端より垂らす白織紐を揺らし、

「陛下、調子に乗りなさるなッ」

と叱りつけたのだった。

執務塔に移動する為回廊を歩いていたガイストとレティアは、前より歩いてくる人物に気付き立ち止まった。

「御無沙汰しております、ウイス、メア」

にこやかに近づいてくるその人物を、二人はよく知っていた。金髪を香油で形良く撫でつけ、肩幅があるため粋な着こなしがよく見える彼は、滅多に登城することはなくとも女使用人達の間では伊達男として人気がある。

「これはまた、トライスト。随分と久方振りですわね」

微笑みながら、レティアは扇を広げて口元を隠した。

「ローエンに帰省したのは昨夜のことですから。

もうひと月以上も屋敷を空けたままでしたので、やることが追い付かきませぬ。

低脳な自分では、執務よりもふらふら遊ぶのが症にあっております」

物腰も柔らかかに肩膝をつき、レティアの手を取り接吻しながら彼はそう答えた。

受けるレティアの目が細まる。

「では当分はローエンに留まられますのね」

「はい、落ち着くまでは王宮と屋敷を往復し続けることになるかと」

では、とトライストは片手を胸に当て廊下の端に背を向けて立ち、ガイスト達を見送る意を示した。王宮内では緊急時以外、地位の高い者を角曲がりまで見送る礼を取るのが正式だ。

トライストの視線を背に受けて歩きながら、ガイストとレティアはその場を離れた。角を曲がった後も首を動かさず前を向いたまま、ガイストはレティアに問う。

「……………どう思う」

「……………少しだけ、引っかかるわ。意識的に姿を見せておきたかったという可能性もある」

同じく前を向いて扇を口元に当てたまま、レティアも呟く。

「女の勘は鋭いというからな……………一応、伝えておくか」

あの方が疑ってあるのにはそれなりの理由がある筈」

ガイストが『誰に』と言わなくともレティアには通じる。

『トウル・ヤーン』への情報通告義務は、最高官の一員である彼らにもあるのだ。

2 : トライスト、ぎんぎら屋敷に向かう

トライストは四頭立ての箱型馬車の中にいた。

天蓋つきで立派なものだが、後々足がつくことを恐れ所有するものではなく貸し馬車を使っていた。

彼は大人しくローエンに残っているつもりはさらさらなかった。もともと役職のあつてないような地位にいる故、好きに動けるのは好都合だ。

定期的に登城しては周囲にのりくらりと遊ぶ人間に見せかけているつもりだが、どうにもあの二人だけは自分を信用していないよなところがある。だが、それでもよい。自分が尻尾を見せなければ全て上手く事が運ぶ。運んでさえしまえば彼らがどう動こうとも遅いのだ。

目的さえ叶えば己の身はどうなっても構わないとトライストは思っていた。だが事が露見して彼が失脚などしようものならば、目的そのものが水の泡となるのも事実。

罪を被るのは哀れな子羊。己の出生を呪うが良い、少女よ。

彼は細長い煙草をふかしながら薄く微笑んだ。

「ウイスプはまだか」

「は。もうあと一刻半程かと」

御者台にいた部下が答える。

「遅い。多少揺れが酷くなっても構わん。急げ」

「は」

部下は手綱を取り直すと、鞭を取り上げ力一杯振り下ろした。

あらん限りの速さで移動を続け、ほどなくして馬車が止まったのはウイスプでは有名な通称『ぎんぎら屋敷』の前だった。

御者が門前にて警護番に用向きを伝えると、悪趣味な門扉が音をたてて開かれた。

銀縁装飾の入った白い仮面を着け、詳細な体格が判らぬよう季節外れの厚手マントを羽織ると、羽帽子を被りながらトライストは馬車から降り立った。

「これはこれはようこそおいでくださいました」

揉み手をしながら転がるようにして自ら出迎えに来たギヨンカに、トライストは出迎え賃としてガイン金貨を一枚握らせる。リルーからサモア銀貨までしか通貨単位の流通がない地方都市では、金貨は非常に貴重だ。ギヨンカは口元を緩ませながらいそいそと客間へ案内した。

無駄に広い客間に通されると、金装飾の茶器に入れられた茶には口つけることなく、単刀直入にトライストは訊ねた。

「首尾はどうか」

「それはもう、万全でございます」

へらへらとした笑みを浮かべながらギヨンカが答える。

「収穫祭まで残すところあとひと月もございませぬ。
仰られた通りワインの一部は特別仕込みにしております。味も上
々ゆえ、怪しむ者はまずおりますまい」

「例の娘はどうだ」

「ああ、あのチーズ売りの。実は丁度今しがたここへ呼びつけたと
ころでございます。

話を振るとそれはもう仰天しておりました」

ふっふおっふお、とギヨンカは笑った。

「初めこそ渋ってはおりましたが、報酬のことを話しますとにべも
なく了承しました。まあ、貧乏人は簡単なものですな。

別室に呼びつけて待機させておるところです」

「そうか」

満足そうに頷くと、トライストは懐から袋を取り出しギヨンカに
渡した。

「これは？」

いぶかしむように中を覗き込んだギヨンカに、

「これを使って当日用のチーズを作るよう、娘に指示をしる。それ
ですべて事が運ぶ」

「おお、ではこれが」

慌てて首を引つ込めたギョンカに、

「そのままでは何も起きん」

と告げながらトライストは静かに立ち上がると、そのまま音を立てずに扉まで移動し突如思い切り取っ手を引いた。

「子鼠が入り込んでいたか」

捻りあげられた右手の激痛に悲鳴を上げたのは、

「レイラ！」

驚くギョンカの呼び声に、

「あ、あああ、御主人様あ……………」

と目に涙を浮かべ、レイラは弱弱しくギョンカに助けを乞った。

「おやめくだされ、その娘は私の使用人ですぞ！」

慌ててギョンカは仮面の男に駆け寄り叫んだ。

「おっ、お茶菓子を、お持ちするようにと、仰せつかって、おりましたので……………それで……………あああっ！」

ぎりぎりと捻られながらも懸命に弁明する彼女の足元には、確かに手を掴まれた時に取り落とした菓子盆とその中身が散らばっていた。

「ふん」

男は手を捻り続けたまま片手でレイラの顎を掴み、ぐいと見やつた。白縁眼鏡の奥にある蒼玉の瞳からぼろぼろとめどなく涙がこぼれ落ちる。そこに映るのは恐怖の色のみだった。

「気のせいならいいのだが。念を入れとくか」

そういつと男は躊躇することなくそのままレイラの右手を捻り絞った。

鈍い音が響くのと同時に共にレイラは絶叫した。

「何をなさる！」

目を剥いて抗議するギヨンカに、トライストは再びガイン金貨を取り出し手渡した。

「これで侘び代わりとしろ。俺の気のせいだったようだ」

泣き叫び続けるレイラとおろおろするギヨンカを後に残し、彼はその場を後にした。今日のところはこれで用件は終いだ。

あの女。最後まで無抵抗だった使用人をトライストは思い返す。扉向こうにいたのが偶然か意図的か判らず終いだだったが、おそらく利き腕であろう右手は当分使い物にはならないだろう。念を入れてもう片側もやっておくべきだったか。

まあいい。ああして自分が怪しむ様を印象づけておけば、相手も動きが取り難くなった筈だ。無実であっても金を渡せばそれで済む。用心するに越したことはない。

そんな事を考えていたせいか、角を曲がった瞬間ぶつかってきた

相手に気付かなかった事に彼は驚き、跳ねとびかけた相手を思わず片手で抱きとめた。

「ごっ、ごめんなさい。お手洗いがわからなくて走っちゃってました」

慌てたように謝りながら彼女は顔を上げると、相手のその風変わりないでたちに驚いたような顔をした。

トライストは黙ったまま手を離すと、振り返ることなくその場を立ち去った。

チユリカは階段を降りてゆくマントの男を見つめていた。

何かが引つかかっていた。

さっきの抱きとめられた感じ。それに、わずかに感じたあの匂い。去ってゆくその後ろ姿を見つめながら、彼女はそれが何かを思い出そうとしていた。

そして、それが香煙草の香りだと気付くまで、そう長くはかからなかった。

3 : チュリカ、小箱を開く

チュリカの父ロイス・ベガレットは、ローエンの宮廷学舎の学師の一人であった。

宮廷学舎はその名の指す通りルルドラ宮廷内に設置された宿舍込みの巨大学習施設である。貴族の子、もしくはは地方学舎から文武に秀でた富裕層の子達が集められ、8歳から14歳の6年間寝食を共にして学習する。

学師達は宿費が免除されるという理由で大半が学舎に住み着いていたが、ロイスは律儀に每晚ローエンにある自宅に帰宅した。彼は幼き娘と乳飲み子である息子、そして病弱な妻を何よりも愛していた。

彼が帰宅すると真つ先に、娘のチュリカが教書を握ったまま飛び込んで出迎えてくれる。そうして片時もロイスの傍を離れることなく、彼女はおぼつかない口調で教書の文字をなぞり読みしながらロイスに質問を繰り返す。つまりは学舎の教書が彼女の遊具となっていたのだ。その為チュリカは学書の中にある知識を随分と吸収してしまい、

「お父さんみたいな学師になりたい」

と言って、大いにロイスを喜ばせた。

チュリカが13歳の時に、それは起きた。

幼い弟のキュウの誕生日ということで、その日は家族で盛大に祝う筈だった。しかし帰宅時間を過ぎても父は帰ってこなかった。外が雷雨だったこともあり家族は不安でご馳走もろくに食べずに待つ

ていたが、やがて睡魔に勝てず眠ってしまった。

ガチャガチャ、という音でチュリカは目覚めた。

首を持ち上げ戸口に目をやると、もどかしそうに鍵が回ると同時に扉が開き、ずぶ濡れ姿の父が飛び込んでくるのが目に入った。燭台の下で針仕事をしていた母が、慌てて拭き布を持って駆け寄ったが、ロイスはそれに構うことなく母の肩を掴んで押し殺しつつも強い口調で囁いた。

「すぐに荷物をまとめるんだ。ここを離れる」

「あなた、急にどうしたの。一体何が」

動揺した母の問いかけにかぶせるようにして、ロイスは言った。

「崩御だ」

その一言でたちまち母の顔色が変わり、何かを察したらしく頷いた。

家族は可能な限り衣類を重ねて着込み、金目になるものと最低限の食料を持ち出すと、雷雨の中ひっそりと家を出た。たくさんの荷物を持った父、眠ったキユウをおぶった母の顔は共に文字通り真っ白だった。チュリカは訳の分からぬまま、震えながら後を追い続けた。

しばらく歩くと、ロイスは道の端に止まっていた二頭立ての箱馬車に乗り込むよう家族に言い、中で待機していた男に金の入った袋を握らせた。どうやら父が手配していたものらしく、男は黙って馬車から降りるとひっそりと去っていった。そうして、馬車は荒々しく駆け出した。父の必死の御者により馬は延々と駆け続け、明るる日の昼過ぎにようやくと家族が辿り着いたのは、山の中腹にある粗末な一軒屋だった。

「いいか……ここはウイスプ地方の、ヤルダナ山脈のふもとに位置する場所だ」

家族でぐったりと外椅子に寄りかかっていると、弱弱しい声で確認するように父は呟いた。

「私達は、これよりチエレアン地方からやって来た身寄りの無い家族、という設定でここで暮らす。チエレアンの訛りはさほど難しくないので、覚えておきなさい」

「あなた、いつまでここで過ごすことになるの」

ほつれた髪を撫でつけながら不安そうに尋ねる妻に、

「分からない。数日になるのか数年になるか。

とりあえずはここで中央の出方を伺う。国外に出るのは本当に最後の手段だ」

思案しながら答えるロイスの顔は、暗く陰っていた。

チユリカにはこうなる理由がさっぱり分からなかった。だが『崩御』というその言葉の意が王にかかる不幸であることは理解していた。

確か昨年先王が崩御して以降、まだ齡十の新王が補佐を強化して即位したばかりの筈だった。

まさか……新王が？

しかし疑問をたやすく口にして訊ねられるのははばかられた。

そうして、手探り状態での一家の生活が始まったのだった。

チュリカは寝台の端に掛けていた。

深夜だった。ジェイスはキュウと共に両親が使っていた隣の寝室に寝ている筈だ。ジェイスが来たその日からチュリカは一応部屋の施錠は毎日しているのだが、今日は念入りに鍵がかかっているかを再確認していた。

しばらく思索した後、やがて意を決したようにチュリカは立ち上がると、着替えの入った箆笥の一番下の引き出しを引いた。そうしてそのまま最後まで抜き取ると、空になった空間の手前の方に隠しておいた小箱を取り出した。

彼女は髪をときほぐしていたが、寝る時はいつも髪留めを腕輪代わりに手首につけていた。そうやって、今までこの髪留めを片時も手離したことはなかった。

髪留めの中に隠した小さな鍵を取り出し、鍵穴に差し込み、回す。ピンと開いた箱の中にあるものをじっと見つめ、そして彼女はそれを手に転がした。

無数のカットが施されたそれは、燦然と輝く巨大な金剛石だった。台座として複雑に絡み合う金と銀の枝葉の先には、実を模したルビィがびっしりとちりばめられている。

しばらくそれを眺めた後、チュリカは箱に入っていた小さな封書を取り出した。

彼女は今までこれを読んだことはなかった。それが父の遺言であったからだ。

あの日、無数の兵達がこの家を取り囲んだ夜、父はチュリカにこの小箱を託した。

「いいかい、チュリカ。

決してこの箱の中味を見ず、目の届かぬ場所に隠し、何を聞かなくても知らぬ存ぜぬで通すんだ。

そして中身は知らずとも、隠し場所は忘れてはならない。

キユウを頼む。どんなことがあっても必ず生き抜くんだ。
父さんはお前達をいつまでも愛しているよ」

チユリカは律儀に約束を守り、決して中身を見なかった。

チーズ泥棒が入った日、思わず初めて中身を確認した。その時は盗まれていないことに安堵したのだが、こうしてゆっくり見るとその価値が途方もないことであろうことが分かる。

(中身を見てしまったからには、詳細を知る必要がある)

チユリカは封を切ることを決意した。昨日ぎんぎら屋敷で会った男の事が、頭から離れなかった。小さな疑惑はいったん火がつくと消えることなく肥大化してゆく。何か刺激的な事で気を紛らわせたかった。

蠟を溶かして紋押しした封印を剥がし、中の書類に目を通した瞬間、読むべきではなかった事を彼女は悟った。

そこに書かれていたことは、田舎の一少女が胸に秘めておくにはあまりにも大き過ぎる事実だったのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7050z/>

ダーナンの旅人たち

2011年12月28日23時54分発行